

日本地球化学会ニュース

No. 103

1985. II. 19

将来計画委員会より

○10月の年会における将来計画委員会シンポジウム「地球化学の将来に向って我々は今何をなすべきか」には、一部の方を立ててしまうほど多数の方にお集まりいただき、感謝致します。

各分野の現状とレビュー、今後の課題などについて6名の方に話していただき、2名の方から会員や学会に対する注文や批判をしていただきました。また、会場からも活発な討論がありました。これらはいずれも貴重なものであり、記録して残しておきたいと考えましたが、頓挫しております。

その理由は、和文誌「地球化学」には原著論文を掲載するという制約があること、地球化学ニュースには財政難で印刷費や郵送費（会誌より高い）の捻出ができないことにあります。この点と合わせて、よい機会ですから、和文誌や財政問題についての御意見をいただきたいと存じます。

○9月に行なったアンケート調査にもご協力いただき、ありがとうございます。この結果は、年会最終日の将来計画委員会談話会「地球化学の研究と教育の現状と問題点」の中で発表され、本ニュースにある通りです。この内容は、上記シンポジウムや談話会での討論事項とともに、測地学審議会地球化学作業委員会より今夏に同審議会に答申される予定の報告書「地球化学の展望と課題」の中に間接的ですが活かされることになるでしょう。なお、同報告書の原案の原稿の執筆者は、地球化学会関係では、小沼直樹、松尾禎士、増田彰正、脇田宏、酒井均、日下部実、半田暢彦、北野康の各氏および角皆です。

○本ニュースNo.101に書きましたように、今期の将来計画委員会は、誰でも、何でも、我々にとって良きようなことを、まず、やってみようということで発足しました。私としては、それを実行しようとする段階で、いろいろな問題点が浮彫りにされ、2年目の活動内容が固まると考えたからです（多くの事柄は、学会内で合意がなければできないでしょうから）。

確かに、年会のあり方、学会誌の改革、教科書づくり、財政基盤の確立、賞の設定など散発的な提案はありましたが、一つの流れになるほどまとまってきたものはありません。将来計画委員会としてとりあげるべき2年目の課題について、皆様方の多数の、積極的な、ご意見とご提案をお待ちしています。

○最後に、これは私の主観ですが、国際的にみて日本の地球化学のレベルの低さが気になります。研究者数が少ないことがその原因の大半とは思いますが、大学院レベルの教育および研究者の再教育などについても考えてみる必要はないでしょうか。

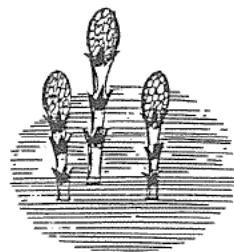
将来計画委員会世話人代表 角皆静男

（連絡先：函館市港町3-1-1、北大水産学部）

1985年度 地球化学会年会

- 期日 1985年10月17日（木曜）から10月19日（土曜）
- 場所 筑波 工業技術院共用講堂
- 課題討論のテーマについて御意見がありましたら、3月末日までに年会準備委員会宛お知らせ下さい。年会についての詳細なスケジュール等はニュース第104号にてお知らせします。
- 年会準備委員会事務局：〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3 工業技術院地質調査所地球化学課

柴田賢



将来計画委員会談話会報告

昭和59年10月20日 年會にひきつづき“地球化学の研究と教育の現状と問題点”と題して将来計画委員会談話会が開かれた。まず5名の話題提供者により、1会員の年齢動態、2年会発表者の所属する機関、3 Geochemical Journal の過去～現在の問題点、4 国内の研究・教育機関および会員からいただいた地球化学の研究と教育に関するアンケートの集計結果、5 国外の地球化学研究との比較、についての資料が提供され、それらを参考としつつ、種々の議論がなされた。ここに上記の1～5の資料および小集會における討論内容を紹介します。広く会員の御意見・御指導をいただければ幸いです。

1. 会員の年齢動態

東工大・理 松尾禎士

本會会員（正会員および学生会員）の平均年齢、年齢分布を名簿によって1973、1977、および1981年度について調べた。平均年齢はそれぞれ42.1才、42.9才および44.8才であった。推定誤差は±0.1才程度である。歴史も規模も異なるので比較するのに必ずしも適当とはいえないが、日本化学会の1977および1981年の会員平均年齢は、それぞれ38.4才および40.2才であった。

年齢別100分率を第1表に示す。

第1表 会員の年齢別100分率

年 令	1973年	1977年	1981年
20～30才	20.5%	14.1%	7.7%
31～40才	19.0%	30.4%	34.8%
41～50才	32.8%	24.1%	20.1%
51～60才	20.4%	23.3%	25.5%
61～70才	5.4%	6.6%	9.3%
71～80才	1.6%	1.2%	2.2%
81～90才	0.3%	0.3%	0.4%

この表から分るように、1973年度では会員の主力は40才台であったが、1977年、1981年では30才台に主力が移行しており、平均年齢は上昇しているものの主力は若い方へ移っていることは好ましい現象である。一方20才台の割合は年次的にはっきり減少している。このことは新しい学生会員の加入が活発でないことを反映している。同様に日本化学会でも1977から1981年度へかけて20才台の割合が減少している。

本会の若い会員の割合の少ないことは、地球化学を専攻する Ph.D. の絶対数の少ないことに起因すると思われるが、そのことに加えて、会員でなくても年會で

自由に発表でき、また単名で Geochemical Journal および地球化学へ投稿できるために、入会の必要が必ずしもないことと関係があると思われる。本會が“開いた”学会である限りは、現会員の財政的負担は増大する傾向となる。

2. 年会発表者の所属する機関

岡山大学温泉研究所 日下部 実

日本地球化学会の実働会員の状況を知る1つの基礎データとして、会員がどのような機関に属して研究を行なっているかを調べて見た。全会員の所属機関のリストは会員名簿に掲載されている。しかしながら名簿を眺めていても実働会員の所属状況は浮び上って来ない。それを最もよく反映させるものの1つとして、毎年、各地で開催される日本地球化学会年會での発表者について、その所属機関のリストを作って見ることにした。年會は毎年秋に行なわれるが、“現状”を知ることにより重きを置いて調査期間を1980年から1984年までの過去5年間に限定した。

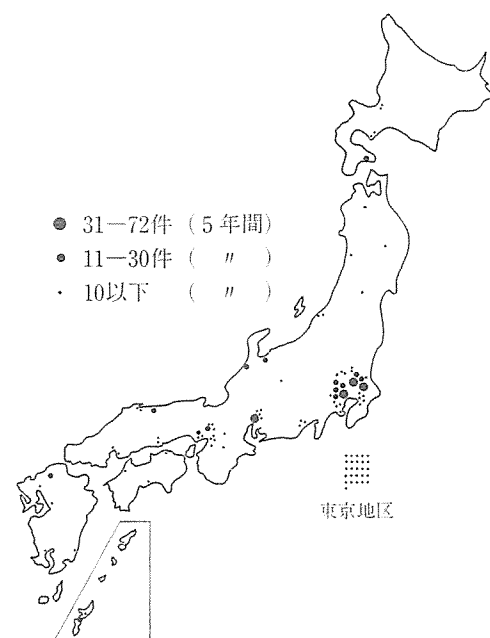
調査方法は単純で、ただ各年度の年會要旨集の論文発表者のうち筆頭者の所属機関、所属部局、発表年度を集計したものである。ただし筆頭者が大学院生等で定職についていない場合および非会員の場合は調査の対象外とした。その理由は、この調査が日本地球化学会の会員の主たる職場を把握することを目的の1つとしているからである。調査期間が5年にわたっているため、その間に退官されたり、新たに採用されたり、あるいは異動があっても、それらの方々はすべて含まれている。

第2表は日本地球化学会年會（1980—1984）の筆頭論文発表者の所属する機関を示す。過去5年間に口頭発表された論文の筆頭者は学生を除いて242名であり、全会員数の30%弱である。このうち国立大学に籍を置くものが半数以上の125名であり、公立大学、私立大学を合わせると、大学関係者が161名で全体の67%を占める。次に多い機関は地質調査所、気象研究所等の国立研究機関で45名、19%である。その次に地方自治体の公害研、衛生試験所等属等に16名、7%が属し、民間研究所・企業には14名、6%が属する。また工専・短大・大学校に4名、中学、高校に各1名所属している。

筆頭発表者の所属する機関の地理的分布を第1図に示した。第1図では各機関を過去5年間のそれぞれの全発表論文数によって、3段階に分けて示してある。筑波、東京、名古屋に研究者が特に集中しているが、他は日本全国に分散している様子が見られる。

第2表 日本地球化学会年會筆頭発表者の所属する機関（1980—1984）

機 関	機関数	人数	割合%
国立大学	44	125	51.7
公立大学	5	8	3.3
私立大学	16	28	11.6
国立研究機関	12	45	18.6
地方自治体の研究機関等	13	16	6.6
民間研究所・企業	9	14	5.8
工専・短大・大学校	4	4	1.7
中学・高校	2	2	0.8
計	105	242	100.0



第1図 日本地球化学会年會筆頭発表者の所属する機関の地理的分布（1980—1984）

第3表は、全体の2/3を占める大学関係者161名の所属する部局についての統計を示す。理学部化学系はいわゆる化学教室であり、地学系は地質・鉱物学教室および地球科学教室を含む。工学部地学系は資源工学科等である。農学部、水産学部、海洋学部、教養部については所属教室までの細分化を行なわなかった。この表によると地球化学は大学の実に様々な学部・学科で研究されていることがわかる。当然のことながら理学部の占める割合が最も大きい。このうち化学系は、理学部、工学部、教育学部を合わせると44%を占める。

教養部に属する方々を化学系と見なすと化学系の割合は53%に達する。このことは日本の地球化学の生い立ちを考えれば驚くに当たらない。過去に比較すべき統計がないので直接比べることはできないが、この数字は人によってはむしろ意外に少ないと感ぜられよう。このことは近年の会員数の増加に伴って多様な分野の人が増えていることと、最近、新制大学に設置された地球科学教室に所する人の割合の増加による“希釈”効果のためと思われる。化学教室の中で従来行なわれてきた分類（無機化学、分析化学……）の中に地球化学が独立した項目にとてなりそうもない情勢と、地球化学は、本来、Geosciences 中の重要な構成要素であることを考え合わせると、上記の“希釈”傾向はむしろ自然の成り行きのように思われる。地球化学の健全な発展のために、理学部地学系の中での地球化学の拡充と、研究所・施設・センター等の中での充実が一層必要であろう。

第3表 国、公、私立大学に勤務する研究者の所属部局

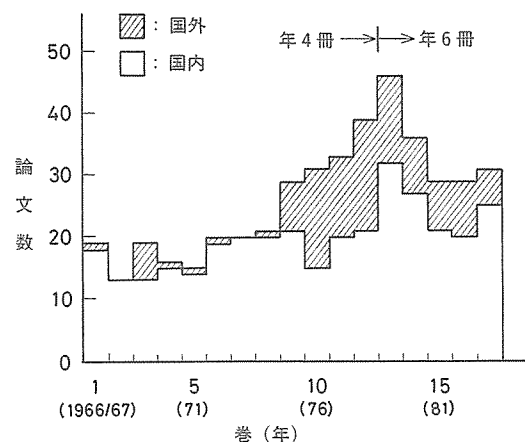
所属部局	人数	割合%
理学部化学系	43	26.7
地学系	29	18.0
工学部化学系	19	11.8
地学系	2	1.2
農学部	5	3.1
水産・海洋学部	8	5.0
教育学部化学系	9	5.6
地学系	4	2.5
教養部	14	8.7
研究所	17	10.6
研究施設	7	4.3
センター等	4	2.5
計	161	100.0

3. G.J.の過去～現在の問題点

富山大・理 水谷義彦

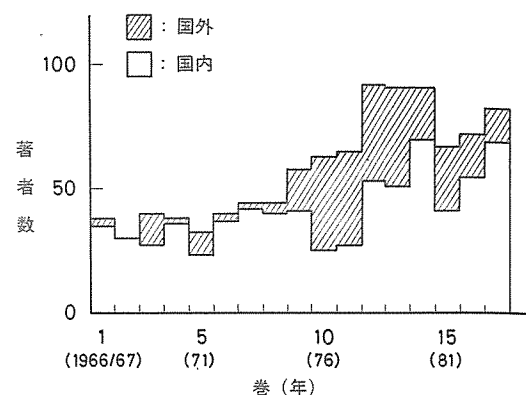
G.J.の刊行に関連する諸問題の中には、日本の地球化学の現状および将来について考える場合に重要な手掛りとなるものが含まれているのではないと思われる。そこで、G.J.の第1～17巻について、“論文を発表したのは、どのような人達か”という点について調査し、その結果の中から問題点をさぐる試みがなされた。そのような方法が選ばれたのは、それが、与えられた短い時間内に実行可能であり、しかも、それによって、目ごろ耳にする“G.J.の論文の著者は顔ぶれが決まっている”という風評の真偽を確かめることができると考えられたからである。

最初に、G.J.に発表された論文の数(ノートおよびレターを含む)の経年変化が調べられた。その結果が第2図である。なお、図に示されている国内からの論文と国外からの論文の区別は、第1著者の国籍によって行なわれた。この図からは、発表された論文の数は、1974年まではわずかな増減を示したにすぎないが、1975~79年に急増し、その後、減少したことが分かる。そして、そのような論文数の変化は主に国外からの論文の増減に左右されていること、一方、国内からの論文は、1979および80年を除けば、創刊以来あまり増加していないことが分かる。G.J.は、1975~79年の論文数の急増によって、それまでの年4冊刊行が年6冊に改められたが、その後はかえって論文数が減少している。このことは、G.J.にとって大きな問題である。しかし、もっと重大なことは、創刊以来、国内からの論文の数があまり増加していないことである。すなわち、その期間に国内の会員数がほぼ倍増したことを考えあわせるならば、そのように論文数が増加していないことは、G.J.と会員の研究活動の結びつきの問題として、今後十分に検討されなければならないことは明らかである。

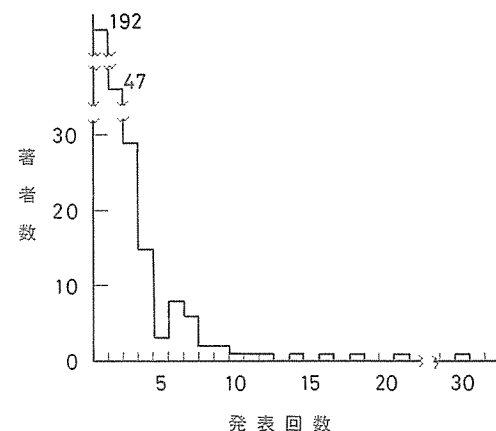


第2図. 掲載論文数(ノートおよびレターを含む)の経年変化。論文数の総計=446(内訳: 国内: 334および国外: 112)。

次に、国籍別の著者の数(共著者を含む)が調べられた。その結果が第3図である。すなわち、1975年以降の国外からの論文の増加(第2図)に伴い、国外の著者の国籍はアメリカ、オーストラリアなど24ヶ国に広がり、G.J.が国際化の方向に進んでいることが明らかにされた。一方、国内の著者の数は不規則ながら増加傾向を示しているが、これは国内からの論文数があまり増加していないことから、共著者の多い論文の



第3図. 著者(共著者を含む)の延人数の経年変化。総数=988名(内訳: 日本: 703名、アメリカ: 139名、オーストラリア: 30名、その他21ヶ国: 116名)。



第4図. 発表回数別著者数(国内のみ)。

占める割合が増加していることを示しているものと思われる。このことの持つ意味までは調査されなかったが、何らかの問題を含んでいるのかもしれない。

では、以上のようなG.J.の流れの中で、国内から論文を発表したのはどのような人達であったか? 第4図は発表回数別著者数を示しているが、この図から、著者達が発表回数5回以上と4回以下の2つのグループに分けられることが分かる。それぞれのグループは、発表回数5回以上の者が29名、そして4回以下は283名であり、それぞれの発表回数の合計は270および434回である。すなわち、発表回数5回以上のグループの寄与は予想以上に大きく、このことが“G.J.の著者の顔ぶれがきまっている”という風評を生むもとになっている

ことは明らかである。そこで、この29名のグループの人達について、さらに調査を行なった結果、次のことが分かった。それは、これらの人達の大部分が、現在50才以上であり、研究成果を挙げやすい立場にあること、地球化学会の中核またはそれに近い役割を果たしていること、そしてG.J.の刊行に賛成し、その創刊以来G.J.を支持し続けてきたことなどである。そのような事情を考えた場合、“顔ぶれがきまっている”ことは、ある程度仕方ないことと理解することができる。しかし、それが他の人達に排他的な印象を与えたことはいなめないであろう。また、この29名の約2/3が化学出身者であるが、この割合は予想されるよりも低い。そして、それらの人達の研究分野は意外に多岐にわたっている。このことは、“G.J.の内容が水の地球化学にかたよっている”というもう一つの風評が、単なるうわさにすぎない可能性を示唆しているように思われる。しかし、掲載された論文の内容(研究分野)と会員の研究分野の広がりとの比較は、大変重要な問題と思われるので改めて調査を行なう必要がある。

以上の調査結果をまとめながら筆者が感じたことは、問題点の多くが日本の地球化学の体質に起因していること、そして、体質改善に最も有効と思われる若手研究者の育成が依然として軌道に乗せられていないことである。

4-1 地球化学の研究について会員へのアンケート調査の結果

地質調査所 田中剛・松久幸敬

このアンケートは地球化学会ニュースNo.102に託し込みで本会会員に配布された。回答をいただいたのは138通で、回答率は約18%である。その結果を第4表に示す。

回答を寄せていただいた方は全年令に分布するが、会員の年令構成(第1表)に対比してみると、若年層からの回答率が相対的に低い。また、地球化学の研究を行う目的が基礎学問の発展への貢献のみならず、資源問題や環境問題への貢献など地球化学の応用面にも広く向けられていることは注目に値する。地球化学において一般的に考えられる大型機器は、相当数の会員がその研究に用いていることがわかる。特に原子吸光(大型機器ではないかもしれないが)は60%近くの人々がその研究に用いている。しかし後述のように、質量分析計などの設置に対する要求は極めて多い。会員の研究対象としては、湖沼・河川、海洋、熱水・温泉・火山ガス、マンタル物質・火成岩が相対的に多い。

第4表に示した結果に加えて、①日本の地球化学の特徴、遅れている分野、近い将来推進すべき分野、②

研究を進める上での問題点、③学会への要望などについての意見が寄せられた。まず、日本の地球化学の特徴については、寄せられた意見の1/3以上が、分析化学の応用としての地球化学であり、データは豊富だが、総合的な観点に欠けるとしている。しかし、同じ特徴を別の見方で捉え、実験技術に優れているとする意見も多くみられた。研究者の層が薄いのも特徴の1つであるが、それはさまざまな人が極めて広い分野をカバーしていることを示すとの意見もある。しかし、さまざまな人がいるのは研究分野においてであり、政治的に有能な人やビッグプロジェクトのリーダーに欠けるという意見も目立っている。

日本の地球化学の遅れている点として、他分野(地質・地物など)の考えを包含した自然現象の総合的解釈を挙げる人が多く(13名)次いで防災・探鉱・公害などへの応用面の遅れ(5名)が指摘されている。分野では宇宙化学(5名)や有機地球化学(6名)などの意見が多い。

今後推進すべき研究分野・方向としては上記の遅れている点が挙げられているのはもちろんであるが、統一見解など出すべきでない。皆が好きにやるべきだ(4名)という意見が目立つ。これはニュース100号“日本の地球化学の落伍”に書かれた“欲しいのは火山でもよい、温泉でもよい、海洋でもよい、誰か日本の地球化学にピークを作る人はいないだろうか……”という意見に共通するものと考えられる。

研究に対する問題点としては予算・人員、ポストが少いというのは予想される意見であるが、設備においてはどの研究室も同種の機器(EPMA、マス)ばかり購入することに対する問いかけが目立った。共同利用に対する大まかなルール作りなども望まれているようである。

若年者に対するポスト不足は最も多く寄せられた意見であるが、逆にポストがあってもタイミング良く人が来てくれない(1名)とか、これはと思える人がいない(3名)という意見もあり、ドクターコースを持つ教育機関のこの点でのふんばり方が重要なポイントになっているようである。

学会に対しては他分野との交流拡大を考え、周辺学会(地質・海洋など)との連携開催を望む声(8名)が大きい。次いで邦文誌“地球化学”に解説記事、技術ニュース、特集号などを載せるように(4名)との意見や、学会の利益団体としての活動(国際会議の開催、研究協力への援助、政治力)に期待する意見(6名)が多い。

第4表 地球化学の研究についての会員アンケート

1) 回答138人、 内男性129人、 女性 9人

2) 年齢別分布 (人数)、 () 内は地球化学の研究を主とする人 (内数)

30才未満	30～39才	40～49才	50才以上
8 (2)	45 (18)	36 (20)	49 (16)

3) 仕事において地球化学の研究の占める割合について (人数)

a) 主として地球化学の研究を行っている	(56)
b) 他の研究 (分析化学・地質学など) の一部として地球化学の研究を行っている	(60)
c) 研究以外の業務 (品質管理、中・高生の教育など) の合間に研究を行っている	(6)
d) 直接の研究は行っていないが、業務上地球化学の情報を必要としている	(12)
e) その他	(4)

4) 研究に対する社会的ニーズの自覚について (件数)

a) 資源問題への貢献	(60)	e) 基礎学問の発展への貢献	(78)
b) エネルギー問題への貢献	(25)	f) 学生・生徒の教育に役立つ	(30)
c) 環境問題への貢献	(90)	g) その他	(5)
d) 災害問題への貢献	(26)		

5) 地球化学の研究において用いられている大型機器について (件数)

a) 気体用質量分析計	(32)	g) X線マイクロアナライザー	(26)	m) 水熱合成装置	(14)
b) 固体用質量分析計	(14)	h) イオンマイクロアナライザー	(2)	n) 高温高压装置	(7)
c) 有機用質量分析計	(13)	i) プラズマ発光分析装置	(7)	o) 核磁気共鳴装置	(4)
d) 蛍光X線分析装置	(31)	j) 加速器	(4)	p) コンピュータ	(39)
e) X線回折装置	(44)	k) 放射線計測装置	(25)	q) その他具体的に	()
f) 電子顕微鏡	(26)	l) 原子吸光分析装置	(80)	(イオンクロマト) (分子発光)	

6) 研究対象別マンパワー (人*力の配分) 率 (%)

a) 宇宙物質	(3.7)	i) 熱水・温泉・火山ガス	(9.9)
b) マントル物質・火成岩	(11.0)	j) 地震・土木関係	(1.4)
c) 変成岩・熱水変質	(2.3)	k) 大気・気象	(6.7)
d) 鉱物・結晶	(4.5)	l) 海洋	(9.4)
e) 鉱床	(5.8)	m) 湖沼・河川	(13.9)
f) 堆積岩	(5.5)	n) 地下水	(12.9)
g) 土 壤	(5.5)	o) 生 物	(3.8)
h) 石油・石炭・天然ガス	(2.2)	p) その他	(1.3)

4-2 地球化学の研究について研究機関へのアンケート調査の結果

このアンケートは地球化学会、地質学会、三鉱学会の各会員名簿に記されている関連研究機関に対し、機関別あるいは部局別に384通発送され、その内203通(53%)という極めて多数の回答をいただいた。その結果を第5表に示す。

地球化学の研究目的は、前記の会員へのアンケート結果と同じく、資源・環境問題への貢献という意識が

高いが、加えて法人・団体および大学を除く国公立研究機関においてはエネルギー問題への貢献が研究目的の大きな部分を占める。逆に大学およびその付置研究所においてさえ、地球化学分野の基礎学問の発展への貢献を目的とする所は57%しかない (43%は目的としない) のが注目される。

第5図は大学およびその付置研究所において、主に地球化学の研究を行っている研究者 (第5表で3-aに分類される) と地球化学の研究が副であると考えて

第5表 地球化学の研究についての機関別アンケート結果

1) アンケートの発送および回収について

	発送数	回答数	回答率%
法人・団体	40	18	45
大学およびその付置研究所	272	150	55
高等専門学校	12	7	58
大学を除く国・公立研究機関	60	28	47
合 計	384	203	53

2) 地球化学の研究目的について (%) 一重複回答を含む

	資源	エネルギー	環境	災害	学問	補助	教育	その他
法人・団体	47	47	87	27	13	47	0	0
大学およびその付置研究所	25	15	47	16	57	21	33	5
高等専門学校	29	14	86	14	29	43	86	0
大学を除く国・公立研究機関	52	43	61	22	35	30	0	0

3) 研究機関の種類別、研究者年齢分布 (院生を含む)

3) - a) 地球化学の研究を主とする研究者数および (%)

	30才未満	30～39才	40～49才	50才以上
法人・団体	7 (30)	11 (48)	3 (13)	2 (9)
大学およびその付置研究所	120 (43)	56 (20)	52 (19)	51 (18)
高等専門学校	0 (0)	3 (50)	1 (17)	2 (33)
大学を除く国・公立研究機関	4 (8)	22 (45)	6 (12)	17 (37)

大学および付置研における研究者の研究対象別マンパワー (力の配分率*人数) の全体に対する割合 (%)

a) 宇宙物質 (5.6)	g) 地震・土木関係 (2.2)	m) 湖沼・河川 (14.0)
b) マントル物質・火成岩 (6.7)	h) 石油・石炭・天然ガス (2.7)	n) 地下水 (1.9)
c) 変成岩・熱水変質 (3.3)	i) 堆積岩 (5.0)	o) 生物 (2.0)
d) 鉱物・結晶 (4.3)	j) 土 壤 (4.1)	p) その他 (1.2)
e) 鉱 床 (4.5)	k) 大気・気象 (6.8)	
f) 熱水・温泉・火山ガス (8.4)	l) 海 洋 (26.6)	

3) - b) 研究の一部として地球化学の研究を行っている研究者数および (%)

	30才未満	30～39才	40～49才	50才以上
法人・団体	23 (26)	41 (47)	14 (16)	9 (10)
大学およびその付置研究所	154 (37)	76 (18)	81 (20)	101 (24)
高等専門学校	0 (0)	1 (10)	5 (50)	4 (40)
大学を除く国・公立研究機関	25 (14)	73 (40)	54 (30)	29 (16)

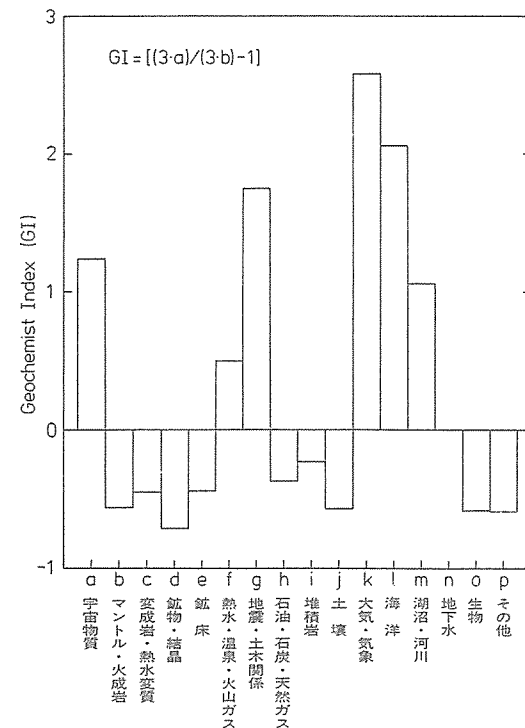
大学および付置研における研究者の研究対象別マンパワー (力の配分率*人数) の全体に対する割合 (%)

a) 宇宙物質 (2.5)	g) 地震・土木関係 (0.8)	m) 湖沼・河川 (6.8)
b) マントル物質・火成岩 (15.1)	h) 石油・石炭・天然ガス (4.3)	n) 地下水 (1.9)
c) 変成岩・熱水変質 (6.0)	i) 堆積岩 (6.5)	o) 生物 (4.8)
d) 鉱物・結晶 (14.7)	j) 土 壤 (9.6)	p) その他 (2.9)
e) 鉱 床 (8.1)	k) 大気・気象 (1.9)	
f) 熱水・温泉・火山ガス (5.6)	l) 海 洋 (8.7)	

いる研究者（第5表で3-bに分類される）を研究対象別に比較したものである。縦軸の Geochemist Index (GI)は、 $GI = [(3-a)/(3-b) - 1]$ の式で表わされるもので、正の値を示す分野では、自分が地球化学者であると考えの人が多く、負の値を持つ分野では、自分は地球化学者でないと考えている人が多いことを示す。すなわち、宇宙物質、熱水・温泉・ガス、大気・海洋・湖沼を研究する人に自分は地球化学者であると考えの人が多く、岩石・鉱物、土壌、生物に関連した地球化学を研究する人には自分は地球化学プロパーでないと考えてる人が多いといえよう。この傾向は前記4-1の会員アンケートの結果にもみられる。

日本の地球化学の特徴、立ち遅れている分野、これから推進すべき分野・方向については、個人アンケート同様、“化学”的色彩が強い、要素研究に留まっているなどの点が指適されているが、研究分野が水圏にかたよっていることについては、それがかってすぐれたリーダがいたことによるとの解釈がみられた。立ち遅れている点はやはりグローバルな視点というのが多いが、立ち遅れなど考えず独自の道を拓け、という意見もあった。今後推進すべき分野として、宇宙化学、生物・有機地球化学、海洋化学、グローバルな地球化学という意見がそれぞれ5～7件づつあった。

研究上の問題点としては、スペース、人材、予算な



第5図. 研究対象別 Geochemist Index

どはほとんどの機関から指適された事であるが、特に個々の研究機関（部局）内で研究上の議論をする相手が少ないこと、試料等の入手難を挙げる所が少なかった。又、地球化学部門が化学、地学、農学等に含まれることによる研究の難しさを挙げる所が多い。予算ではフィールド旅費、観測の予算などの問題点が指適されている。

学会への要望ではシンポジウムの開催、解説書の出版等による啓蒙活動を望む声が最も大きい。次にプロジェクト研究の企画、他学会との連携が望まれている。又、個々の意見として、小中高教員の組織化、試料の斡旋、関西地区での活発な活動が期待されている。

4-3 地球化学の教育について教育機関へのアンケート調査の結果

このアンケートは地球化学会、地質学会、三鉱学会の各会員名簿に記されている関連教育機関に対し、機関別あるいは学部、教室別に284通発送され、163通(57%)の回答をいただいた。その内126機関(学部・学科)では地球化学の教育について何らかの体制があることがわかった。その結果を第6表に示す。

特徴的なのは地球化学を専攻する学生、あるいは地球化学に関連あるテーマを持つ学生は少なくないのだが、就職においてその専門を生かす事ができた学生が極めて少ないことである。学位取得者は3ヶ年で19名、年間6名である。これは地質学雑誌90巻10号に発表された地質学関係の学位取得者数104名(地球物理、地球化学の相当部分を含む)に比べると極めて貧弱と言えよう。

地球化学の教育上の問題点としては、フィールド教育の旅費がなく、いきおい室内での教育が中心にならざるを得ない(6件)。適当な教科書、入門書がない(4件)講師がいない(3件)が目立つ意見であった。又、現場の経験から、教養課程の学生には地学や化学の専門的な授業(たとえば岩石学、有機化学)より、総合科学としての地球化学が科学への導入により適しているという意見が目立つ。

地球化学会への要望としては、上記の意見から考えて当然のことであるが、教科書・入門書の刊行を希望する意見が29件中7件と圧倒的に多く、加えて邦文会誌“地球化学”の活用や講演会などによる啓蒙活動を望む声が複数あった。又、最も基本的なことから、教育分野における優れた後継者の育成が強く望まれている。さらに未来の地球化学を支えるものとして化学における地球化学は天文や地学のように、中・高校におけるクラブ活動の一分野として適しているのではないかと意見があった。

地球化学関係の講座等の新增設を計画されたことはありますかという問いに対し、教室として有と答えていただいたのは、日本大学文理学部、国士館大学教養部、愛知教育大学教育学部地学教室、秋田大学教育学部地学教室、秋田大学鉱山学部鉱山地質学教室、金沢大学理学部化学教室、埼玉大学理学部化学教室、佐賀大学理学部化学教室、静岡大学理学部、信州大学理学部地質学教室、新潟大学理学部化学教室、山形大学理学部化

学教室、神戸大学理学部地球科学教室、名古屋大学理学部地球科学教室、名古屋大学水圏科学研究所、広島大学理学部地学教室、北海道大学水産学部北洋水産研究施設の多数にわたる。更に個人的に計画をしたことがあるのは東京工業大学理学部化学教室ほか12学部・教室の多数である。これらの計画に対しては学会として可能な限りの積極的なバックアップをすることが必要と考えられる。

第6表 地球化学の教育についての機関別アンケート結果

以下の集計は A) 大学院を持たない教育機関(短大・高専を含む) B) 学部と修士課程を持つ教育機関 C) 博士課程を持つ教育機関 に分類して行った。

1) 地球化学を内容とする講義について

	講義の数	学生数の範囲 (平均)	地球化学の専任教員			
			教 授	助教授	講 師	助 手
A 機関	31	15～1300 (40)	9	6	1	1
B 機関 (学 部)	82	7～ 100 (30)	20	12	3	8
＂ (大学院)	29	1～ 14 (4)				
C 機関 (学 部)	53	15～ 150 (30)	21	24	4	27
＂ (大学院)	44	2～ 30 (5)				

2) 地球化学を専攻する学生あるいは地球化学に関連あるテーマを持つ学生数(人)

	地球化学を専攻	関連テーマを持つ
A機関学部学生	22	23
B機関学生学部	90	約105
" 修士学生	36	約50
C機関学部学生	66	約75
" 修士学生	32	52
" 博士学生	24	34

3) 地球化学を主な専攻分野とする学生の就職状況について(昭和56~58年度の合計人数)

a) 学部卒業生	a-1) 大学院修士課程に進学した人	(176)人
	a-2) 地球化学を生かせる職についた人	(45)人
	a-3) 地球化学に一部関連する職についた人	(109)人
	a-4) 地球化学と全く無関係の職についた人	(392)人
b) 修士課程修了者	b-1) 大学院博士課程に進学した人	(59)人
	b-2) 地球化学を生かせる職についた人	(19)人
	b-3) 地球化学に一部関連する職についた人	(33)人
	b-4) 地球化学を全く無関係の職についた人	(75)人
c) 博士課程修了者	c-1) 地球化学と生かせる職についた人	(9)人
	c-2) 地球化学に一部関連する職についた人	(7)人
	c-3) 地球化学と全く無関係の職についた人	(13)人
	c-4) オーバードクター	(10)人
	c-5) 海外留学など	(5)人
d) 論文博士を含めて学位取得者数		(19)人

5. 国外の地球化学との比較

北大・水産学部 角皆静男

日本の地球化学は、地質学に比べて弱体であるとか、化学教室出身者で占められ、水に偏るとか言われていますが、それを国外と比較することによって客観的にみてみようとするものです。といっても、質的な面は無理ですから、研究者数を米国の名簿から調べてみただけです。

第7表は、American Geological Institute 発行の1979年版 Directory of Geoscience Departments からまとめたもので、以下の制約があります。このDirectory にのっているのは米国とカナダにおける大学、しか

第7表 米国およびカナダの地球科学者

	人 数	割合(%)
地 質 学	2,766	41.8
地 球 化 学	589	8.9
内 一般地球化学	102	1.5
分 析 地 球 化 学	52	0.8
実験岩石学・相平衡	78	1.2
地 球 化 学 探 鉱	41	0.6
年代学・放射能	91	1.4
低 温 地 球 化 学	82	1.2
海 洋 地 球 化 学	40	0.6
有 機 地 球 化 学	34	0.5
安 定 同 位 体	40	0.6
微 量 元 素	29	0.4
固体地球物理学	657	9.9
古 生 物 学	695	10.5
水文学・陸水学	193	2.9
海 洋 学	697	10.5
内 海 洋 化 学	86	1.3
惑 星 科 学	77	1.2
内 宇 宙 化 学	15	0.2
そ の 他	948	14.3
(大気科学・地理学など)		

第8表 米国・カナダの地球化学者の職種別数

	機関数	教 授	準教授	助教授	その他	計
米 国	228	199	138	97	151	585
カナダ	34	37	18	16	34	105
計	262	236	156	113	185	690

も地学関係の教室関係者です。従って、政府機関や民間企業又大学でも、化学教室や大気や海洋関係の教室も独立している場合には含まれない場合があります。例えば、ウッズホール海洋研究所やアラスカ大学の海洋化学は含まれていません。又助教授以上の教官、講師、併任教授、名誉教授が含まれ、助手は大部分除かれています。

海洋化学と宇宙化学を含めると、地球化学は690名となり、固体地球物理学や古生物学と肩を並べ、地質学の4分の1になります。なお、地質学者の中には一般教育を担当する者が多く、博士課程のある所、あるいは研究所に限れば、この差はぐっと縮まると思われます。

第8表は、上記690名を職種別に分けたものです。米国には地球化学の教授が約200名いるということです。要するに、米国と比べて日本の地球化学者は絶対数でも、地球科学の他分野との相対数でも少ないといえるでしょう。

上記の表には、水関係はすべてが含まれてはいません。それで、National Research Council 発行の1982年版 U.S. Directory of Marine Scientist から米国の海洋化学者数を調べてみたのが第9表です。この表には大学院生は含まれないが、民間研究所や政府機関の研究者は含まれます。なお、一部の者は重複しています。また、第7表では海洋地球化学や海洋化学以外に含まれていた者もあります。それで、第10表に海洋の他の分野を第1専攻とする者を除いて内訳を示します。

米国の海洋化学者の合計は390名、内大学教授は72名になります。教授数では全地球化学の3分の1近くを占めるといえるでしょう。日本の海洋化学は米国の1桁下といえるでしょうが、日本の地球化学が水(海洋)に偏っているとはいえないでしょう。私は一海洋化学者として、日本は島国ではあっても、海の国ではないといいたいです。

第9表 米国の海洋学者 (重複あり)

	人 数	割合(%)
海洋生物学・水産学	1,838	41.0
海 洋 化 学	497	11.1
海 洋 物 理 学	874	19.5
海 洋 工 学	392	8.8
海洋地質・地物	624	13.9
他 の 地 球 科 学	124	2.8
そ の 他	131	2.9

第10表 米国の海洋化学者 (重複なし)

所 属 機 関	機 関 数	研究者数
総 数	133	390
大 学	72	227
民間研究機関	21	64
政 府 機 関	40	99

○専門別研究者数

地球化学	184	合 計	390名
分析化学	54		
生 化 学	40		
物理化学	35		
有機化学	30		
放射化学	22		
天然産物	13		
無機化学	12	内 大学教授	72名

6. 討論内容の紹介

岡山大学・温泉研究所 日下部 実

将来計画委員会談話会では1～5までの項目についてそれぞれ話題提供者が資料をもとに前述の内容の説明を行なった。その後、各々の話題について質疑が行なわれた。ここでは資料として残らなかった討論内容を紹介する。

(a) 日本地球化学会の会員増について

最近若い人が日本地球化学会に入ろうとしない、また入会せずに学会活動に参加できるので、入会せずに済まそうとする風潮がある。かつて、日本地球化学会での講演や会誌への投稿には会員であることが条件とされており、その条件を厳格に守った時期があった。しかし、その行き過ぎに対する反省から、現在はそのような制限が撤廃されている。その結果が前述の風潮を呼んでいる。今後は講演者や投稿者が非会員である場合には、入会を勧めたいとの意見がある。

(b) 地球化学系の講座・ポスト増について

地球化学の振興のために研究・教育機関の充実が必要なのは万人の認めるところである。講座増や地球化学関連ポストの人事選考に際しての事情や実情について種々の議論があった。

過去10数年の間に地方大学の文理学部改組に伴って、地学教室あるいは地球科学教室として120～130の地学系教官用の席が作り出された。もともとからいた人々の移行を除く純増分が、どのような分野の人によって占められたか、という点を調べてみると、地球物理学系が約50名、地球化学系がその1/2、残りは地質学系の人によって占められている。また地球化学系の人講座の

長を占める割合は1/3よりさらに少ない。このことは一体、何を意味しているのだろうか。

伝統的地質学系の人々が主流を占める新しい地学教室あるいは地球科学教室の中で、地球物理学も地球化学も等しく重要であるとの認識はある。しかしながら、彼らが地球物理学の教育を肩代りすることは困難であるものの、地球化学の教育・研究は自分達でできると意識が上述の1/3という数字に反映している、とする解釈が述べられた。つまり地球科学の中における日本の地球化学の位置づけの問題に帰着する。岩石圏の地球化学を考える場合、地質学との対応で研究を進めようとする限り、現在の地球化学の立場は弱くなるのではなかろうか。何故ならば、地質学者が化学的手段・方法を用いれば地球化学者に容易に変貌することができるのだから。したがって、地球物理学が物理学から、そして生化学が化学から発展したように、化学の中から地球化学を発展させる道を歩むべきである、との意見が出された。これに対して地球物理は分野ではなくて、地球科学の様々な対象に対して地球物理学的な研究を行なっている人々の連合体を指すのであって、その意味で地球化学も分野ではなく地球物理と同様の連合体であるとの意見が出された。つまり様々な対象に対して地球化学的研究が行なわれるべきであるとの立場である。

研究推進の原動力は自己の好奇心であって、そこには何の境界も存在しない。利益を共通し合える場が学会である。この立場を認識すればより多くの人々が“分野”を越えて集合すると考えられる。このことを敷衍すれば、誰もが認めるような良い仕事をする人が現在の地球化学界の中で増えさえすれば、前に議論されたところの、新しい地球科学教室における地球化学系教官と地球物理系教官の数の比が1/2であるということに象徴される問題も自ずと変化しうとの意見があった。これに対して、理想としてはその通りであるが、academic position の獲得については、もっと別な次元の要素が現実には強く働くことが指摘された。

(c) 地球化学振興の方策について

シンポジウムや将来計画委員会談話会で指摘された日本地球化学会が内包する問題の多くは、化学系の地球科学の研究・教育機関が少ないことに起因する。今後の日本の地球科学の正常な発展のために、地球化学の拡大を主張する必要がある。

研究面の活性化には大型 project への参加および設立等が有効であろうし、教育面の充実には良い教科書を作ること、啓蒙・宣伝活動を活発化するなどとならんで地球化学の講座増および地球化学科の設立が提案されている。多様な問題の解決には、unique solution

を求めようとするよりは、常に複眼指向—複数の路線が選べること—が適切である。その意味で、地球化学科がもし設立されるとすれば、複数できることが好ましく、あるものは化学的色彩の濃いもの、またあるものは地球科学的色彩の強いもの、といった内容のものが好ましいとの意見が出された。



Sixth International Conference on Geochronology, Cosmochronology and Isotope Geology 参加者に対する援助についてのお知らせ

来る1986年6月30日～7月4日英国Cambridgeにおいて上記国際会議が開催される予定です。第5回同会議(日光、1982年)の剰余金は日本地球化学会へ委託されています。この資金を用いて第6回の会議参加希望者の渡航費に対して下記の要領で援助を行ないます。

- 第6回上記会議に対し、約10名(第7回も同様の募集を行なう予定)、1名当り30万円程度
- 対象者は1946年1月1日以降出生の我国研究者とする。第6回同会議の1st circularに対し参加および発表申込みを行なった者が応募できる。
- 選考方法： 応募者には1986年3月開催予定の同位体比部会において、国際会議提出論文を英語で口頭発表していただきます。審査の上内定された者のうち2nd circular以降、プログラム編成の終了時に最終決定を行ない、援助金を渡航前に本人に手交する。帰国後に簡単な報告をうける。選考結果は本人に直接連絡するほか、本ニュースに掲載する。応募者は、〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1、東京工業大学理学部化学教室 松尾領士(世話人)宛、A4版1頁に必要事項記載の上、1st circularへの返信(Preliminary Reply Form)のコピーをそえてしかるべき時期に申し込んで下さい。



○ 催し案内

1) 第1回 ESR 年代測定国際シンポジウム (共催)

日時：9月1日(日)～4日(水)
会場：宇部市文化会館及び秋吉台科学博物館
趣旨：電子スピン共鳴(ESR)年代測定は、地球科学、海洋科学、考古学の広い分野に発展しており、わが国でも15以上の研究機関の方々が取組んでいます。今回は海外からの論文参加を呼びかけ、秋芳洞のある山口県でシンポジウムを開催し広く交流を図る予定です。
日程：9月1日(日) 登録
9月2日(月) 研究発表・懇親会
9月3日(火) 研究発表・秋吉台訪問
9月4日(水) 研究発表・一部は広島へ

議題：

1. ESR 年代測定
方法論と技術の改善
 2. 環境放射線線量評価
洞内放射線、年間線量率評価法
 3. 洞窟学と人類学
鐘乳石・石筍と化石骨
 4. 海洋科学、地球科学
貝、サンゴ、深海底堆積物
 5. 断層内鉱物、火山、地熱、その他
石英等の鉱物とその応用
 6. 考古学、古文化財、法医学
有機物の年代、その他
 7. ESR 線量測定、その他
原爆放射線評価、事故及び生涯被曝線量、ESR 線量計素子
- 参加費：15,000円
申込・問い合わせ先：〒775 山口県宇部市常盤台 山口大学工業短期大学部 第1回 ESR 年代測定国際シンポジウム事務局 池谷元伺 (電話 0836-31-5100)

2) 地研研大学講座・第III期

- 第1回 1月12日(土)17時～19時
「原始大気・海洋と生命の誕生」
講師 秋山雅彦(北海道大学理学部)
- 第2回 2月23日(土)17時～19時
「第4紀の地殻変動と海面変動」
講師 菊地隆男(東京都立大学理学部)
- 第3回 3月16日(土)17時～19時
「地質構造と地盤変動」
講師 角田史雄(埼玉大学教養部)
- 第4回 4月20日(土)17時～19時
「天気予報と数値予報」

講師 大西晴夫(気象研究所)

第5回 5月18日(土)17時～19時

「鉱物の生い立ちから分解まで」

講師 富田克敏(京都大学理学部)

会場：後藤学園(国鉄池袋駅下車7分)
問い合わせ先：〒171 東京都豊島区南池袋1-8-7
会津天宝ビル内 地学団体研究会内

3) 昭和60年度質量分析連合討論会 (共催)

主催：日本質量分析学会
日時：昭和60年5月16日(木)～18日(土)
会場：豊橋技術科学大学大講義室(豊橋市天伯町)
討論主題：質量分析の基礎から応用まで(含装置技術)
講演申込：昭和60年1月31日 締切
1 講演ごとに B5 版用紙に、1)口頭・ポスターの希望、2)講演題目・所属・発表者氏名、3)申込者・連絡先住所・電話番号、4)200字程度の概要、を記入して下さい。申込者には2月中旬に原稿用紙等送付します。

講演要旨原稿締切 昭和60年3月31日

参加費：一般4,500円、学生3,000円(含要旨集代金)

参加申込：4月15日以前送金(小為替)は各500円引
申込みおよび問い合わせ先：〒440 豊橋市天伯町宇雲雀ヶ丘1-1、豊橋技術科学大学

TEL 0532-47-0111 野田 保、奥谷 剛

4) 第22回理工学における同位元素研究発表会 (共催)

会期：昭和60年7月1日(月)～3日(水)
会場：国立教育会館(東京・霞が関)
発表申込締切：昭和60年2月28日(木)
申込先：〒113 東京都文京区本駒込2-28-45
日本アイソトープ協会内 同発表会運営委員会
電話 03-946-7111 内線261

5) VI Latin American Geological Congress (Association of Geoscientists for International Development AGID)

Oct. 9th-12th, 1985, Bogota, D.E.-Colombia
Executive Committee: VI Latin American Geological Congress, INGEOMINAS AGID,
Diagonal 53 No. 34-53, P.O. Box : 4865, Cable : INGEOMINAS, Bogota, D.E.-Colombia

6) Fourth International Kimberlite Conference.

11-15, August 1986 Perth, Western Australia
Correspondence to : Mr. J. D. Lewis-Secretary,
Fourth International Kimberlite Conference

Geological Survey of Western Australia, Mineral House, 66 Adelaide Terrace, PERTH Western Australia 6000. Telephone : (ISD619) 325-0161, Telex : MINEWA AA95791

○ 朝日学術奨励金

昭和60年度の標記奨励金の候補研究を募集しています。

締切：昭和60年2月末日

申込先：〒104 東京都中央区築地5-3-2

朝日新聞社東京本社企画部朝日学術奨励金係

電話 03-545-0131(代)

○ 多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究・応用研究・計画研究

標記研究を募集しています。締切は本来は1月末日ですが、ニュースの発行に間に合いませんので、2月末日までは応募を認めることになっています。

問い合わせ先：〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14
地下鉄ビル内 財団法人 とうきゅう環境浄化財団
電話 03-400-9142

○ 申込期限の切れている募集

ニュース発行の期日に間に合わない募集を3件お知らせします。例年のことですので御承知おください。

1) 秩父宮記念学術賞授賞候補者の推薦

締切：昭和59年10月20日(土)

問い合わせ先：〒102 東京都千代田区麹町5-3-1
ヤマトビル内 日本学術振興会 電話 03-263-1721

2) 東京大学海洋研究所研究船白鳳丸・淡青丸、大槌臨海研究センター、および研究会・外来研究員の共同利用公募

申込期限：昭和59年11月30日

申込先：〒164 東京都中野区南台1-15-1
東京大学海洋研究所 総務課共同利用係
電話 03-376-1251(代)

3) 昭和60年度「原子炉等の施設」大学共同利用の募集

趣旨：原子炉による照射およびこれに関連する研究を行うもので、日本原子力研究所、立教大学原子力研究所の利用が必要な研究

資格：大学の助手以上の職にあるもの

申込：所定の申請書3部(用紙は申込先へ請求する)

期限：昭和60年2月4日

申込先：〒113 東京都文京区弥生2-11-16

東京大学原子力研究総合センター業務掛

問い合わせ先：申込先へ 電話 03-812-2013

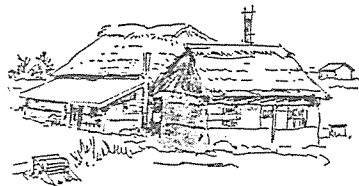
○スイスからの便り

岡山大学温泉研究所 加々美寛雄

1983年2月より2年間ほどチューリッヒのスイス連邦工科大学(ETHZ)のスタイガー教授のところで研究をしています。スイスは人口600万、九州とほぼ同じ大きさの非常に美しい国です。スイスの北側には、ドイツの平原に続く平地が多く、一方、南側にはアルプス連峯が横たわっており、年中観光客が絶える事はありません。チューリッヒは南北に細長い形をしたチューリッヒ湖の北端に位置し、人口38万のスイス最大の都市です。この街は観光的な雰囲気には乏しいのですが、商工業都市のため活気に満ちています。ETHZの本部と、毎日通勤している研究室はチューリッヒ中央駅から市電で数分、歩いて10分ほどのグラナーアルプスを遠望できる高台にあります。このアルプスは、ここから直線距離で50kmも離れている事と、湖にモヤがかかる事が多いため、異常な天候以外にはめったに見る事ができません。さてETHZは1854年に創立され、1969年迄唯一のスイス連邦立大学だったのですが、1970年にレマン湖畔のローザンヌに同様の大学(EPFL)ができて以来、連邦立大学は2つとなっています。チューリッヒのETHは13の学部から成り、学生総数は約8,500人、そのうちの約1,000人が外国人で、日本からも毎年数人ほど来ているようです。私の研究室のスタイガー氏は自然科学部中の結晶学・岩石学教室の教授で、ジルコンのU-Pb年代、K、Rbなどの崩壊定数をまとめた論文で御存知の方も多いかと思いますが。スタイガー教授は自称51才、乗馬をしたり、ウィンドサーフィンをしたりバイクを乗りまわしたりする(もっともこれは最近あまりしないようです)気分的にはかなり若い人で、料理もうまく、客員教授としてみえていたカリフォルニア大学のDePaolo氏夫妻とともに夕食に招かれた時は自慢の腕をふるってくれました。研究は、北アメリカ、グリーンランドの先カンブリア代岩石、スイスおよびその周辺地域のカレドニア～第三紀岩石のK-Ar、Rb-Sr、Pb、最近ではSm-Nd年代、それら岩石中のジルコンのU-Pb年代に関するものが多く、1961年以来50編をこえる論文を発表しています。最近の興味は、アルプス変動の冷却史をいろいろな鉱物を使いK-Ar、Rb-Sr法から解析する事と、singleジルコンのU-Pb、Sm-Nd法による年代と、全岩の他の方法による年代との関連性を明らかにする事にあるようです。いずれも鉱物を対象とする仕事なので、鉱物の選択、分離には厳しい目を持っており、学生は、「ハードワークだ。」と言いつつ、アイソグダイナミックセパレーターで分離した鉱物をさらに一つ一つハンドピッキングしていますが、測定に必要な量を集

めるのに1週間近くもかかるとの事です。現在スタイガー教授のところには3人の学生がいます。修士論文のテーマの決め方は、日本の大学の場合とあまりちがわないようで、学生が抱えている興味に対し、教授がサジェッションを与えてテーマを決めるとの事です。そしてそのテーマにあったフィールドをいくつか選び出した後、学生が実際にそのフィールドを歩いてみて自分に一番あったフィールドを決めるようです。博士論文の場合は、研究しているうちに初め考えていたテーマと多少変わってしまう事があるようですが、これも日本の場合と大して変らないのではないかと思います。なお、博士課程の学生には生活費の約50%が支給されています。だいぶ長くなってしまいましたので、このくらいで終る事にします。チューリッヒの商店街は今クリスマス商戦たけなわで、イルミネーションがとても綺麗です。

1984年12月10日



○1984年環太平洋国際化学会議雑感

標記国際化学会議は昨年12月16日から21日まで、ハワイのホノルルで約6,000人の化学者が出席して開催された。地球化学部門では、ニュース100号に掲載された5つのシンポジウムがひらかれ、さらに分析化学、環境、地球化学の一般講演やポスターセッションに多くの当学会会員が参加した。

会議に先立ち、14日から米地質調査所のGreenland博士夫妻の案内でハワイ島の火山見学があり、当学会関係者が14名参加した。日本人の他には地球化学者以外の人の参加も多くあり、総勢80名程でキラウエアのクレータやサルファーバンクを見学した。残念ながら滞在中に噴火がなかったが、10日前の噴火で噴出したペレの髪の毛や泡状のガラスを見ることができた。ばう大なラバーや日本の火山と異なる噴火口の概観から生きている地球を実感として受けとめることができた。(小椋記)

○デンバーの四季

東北大学・理 藤巻宏和

大陸のまん中、標高1,600mのデンバーの冬は大変寒く、戸外に10分間立っていると脊椎骨まで凍りついたような気持ちになります。太陽が出ると雪はどんどん昇華してしまい、道路はちっとも泥まみれになりません。雪はサラサラの粉雪で、試みに雪グルマを作ろうとしてもうまくできません。近所の子供達が、雪グルマらしきものを作っていたのを見ておりましたら、雪をスコップで運んで盛りあげ、たたいて固めてから削って作っていました。ロッキー山脈にあるスキー場の雪は素晴らしく、前夜最後のサンプルの δNd が他のサンプルと大きく異なることなど頭から消えてしまいます。リフトも日本のように混雑していませんので、夕方迄には足がフラフラになり、走っているインターステイト90の山側の崖が20億年の花崗岩でできていても感慨が湧かなくなります。

日本と同じような方法で雪グルマを作ることができるとなると、突然春になります。それまで茶色だった町の景色は黄緑色に変化し始め、人々の顔もなごやかになります。しかし3月終り頃ヒューストンに出かけてゆくと、あまりなごやかな顔をしてはいられません。南極で発見されたある種の隕石やSNCが、月から来たとか、火星から来たとか、いやそうではないとかいう議論をするのではなく、月のどこのクレーターから飛び出したか、火星のどこから来たのかということで、一戦も二戦も交えなくてはなりません。月の岩石に関しては以前より静かになり、Ringwoodさえ無視すれば和気合々といったところですが。月の各種岩石の成因について、厳密な結論に到達するのはとうてい不可能でしょうが、一定の枠は完成しているので議論の方向は同じようになります。むしろ、月から来た隕石やSNCが今後大きな話題になりそうです。

野うさぎがあちこちで自動車にひかれるようになり、日照時間が少し長くなると夏時間に切りかわり、町全体が濃い緑色になります。ロッキーの山中では六月中旬迄スキーができますが、一度などはスキーを楽しんでいる最中に猛吹雪となったこともあります。山の中をドライブしていると、突然スキーをしている人が道路に飛び出してヒッチハイクをするのもこの頃です。野山では色とりどりの花が咲き、大きなマウンテントラウトを持って山中でバーベキューをして食べるのに絶好の日頃ですが、遊んではばかりはいられません。次のヒューストン戦に向けて作戦が始まります。私達は、LuとHfの元素分配と、Hfの同位体比を用いて月の総ての玄武岩をつくってしまうという話しをしました。これに対してアレルギー反応をおこした人が何人かお

りまして、もう一戦交えようというわけです。このアレルギー反応をおこした人は岩石屋さん達で、私達の話しの弱点を正確に指摘してきました。細かな説明は省略しますが、ilmeniteと液の間のHfの分配が正しいかどうかということ、そしてGreen Glassと呼ばれる月の試料のHfの同位体比の分析結果がないことの二つでした。この話しをもし日本のどこかの学会でしたとすると、岩石学側の人はプログラムを見るだけで話しを聞かないでしょうし、地化側の人は話しの内容にどんな問題があるのか全く気がつかずに終わってしまう。さて、LuとHfを多少加えた月の玄武岩組成の液からilmeniteを合成してくれるようにLPIに頼んで、Green GlassのHfの同位体比を何とか測定できないものかと試行錯誤的実験を始めました。Hfの同位体比測定は大変困難で、Reのフィラメントが焼き切れる前に測定が終ると“Good Luck”と言いつつ程緊張します。試料から少なくとも数 μg のHfを回収しなくてはなりません。問題のGreen Glassは大きくても数10mg程度で、それに含まれるHfは1 ppm以下ですから、測定に充分なHfを回収することは不可能で、何らかの方法によりイオン化の効率を良くしなくてはなりません。カーボンやシリカゲル、粉末Re、Re酸化物の粉末などと0.1 μg 程度のHfを混ぜ、混ぜ方を変えてトライアンドエラーを始めました。しかしうまくゆきませんので、イオンハウス内の雰囲気を調節することにしました。ハロゲン族のガスをイオンハウス内に微量流してやるとイオン化効率が良くなったような気がすることもありましたが、追実験をやるとうまくゆきません。この実験を続けつつ、地球のLuとHfのデータをまとめ、Hfの同位体比のデータとつきあわせると、地球の形成期に月と同じようなマグマオーシャンがあったという証拠の一つが浮き上がりました。月程度の大きさの天体でも表面から数百km程は溶けていたというのに、地球が溶けなかったとは考えられないのですが、その後のいろいろな作用により地球表面からは総ての証拠が消去されてしまっています。これをどうやって示すかということですが、LuとHfおよびHfの同位体比の研究は大変強力な手段です。LuとHf共にnon-volatile元素ですから、原始地球にどのくらいのLuとHfが含まれていたか確かな推定ができます。また、Sm-Ndよりも元素分配の差が大きく、いろんな過程でLuとHfの分離・濃縮がおこり得ます。特にgarnetやilmeniteが晶出する過程で極端なことがおこり得ます。さて、このようにしてできあがった地球のマグマオーシャンのモデルは、garnetが深く関係しているらしきことを暗示しておりました。また、Lu-HfとHfの同位体比化石は、MORBの源物質はマントル

内の浅い所で部分溶融したのでしょうか、元来 garnet を含むマントル物質であつたらしいということも示しておりました。更に、incompatible 元素に富むある種のアルカリ岩やキンバーライトは月の KREEP のようなもので、地球のマグマオーシャンの残液が部分的に濃集し固結して、それが再溶融してできたものらしいということも暗示しておりました。

秋が来ると極めて短時間に町全体が茶色になりますし、人々の顔も「さあ、冬だ」と緊張してきます。夏から続けて Hf のイオン化効率を改善する実験を続けつつ、地球上各種の岩石の Hf の同位体比のデータを集めて、地球のマグマオーシャンの実像を浮き上げようとしていました。それまで、Hf のイオン化効率の改善は総て失敗してしましたので、とうとう plating を始めましたが plating すること自体ほとんど不可能でした。Hf をメタルにして Re のフィラメントに載せたらうまくゆくのかどうかの見当もついていません。地球のマグマオーシャンのモデルは学会で提案したのですが、今度ばかりはピンとこなかったようで、地殻物質のリサイクルモデルを提案している人達から反駁があっただけでした。しかし、今のところ地球のマグマオーシャンの証拠としてはこれが唯一だと思っておりますので、近いうちに論文にする予定です。

私を呼んでくれた人はあまりにも気のやさしい人でして、会話を囲らなくなった頃からは幾度となく彼に「かわって文句を言ってやろうとか、どなり込んでやろうとかかと思いました。しかし、その度毎に「仕方ありませんね」と我慢しておりました。この事を考えると今だに胃が消化不良になる思いです。そんな気のやさしいボスだったからこそ、いつもめっちゃくちゃなことばかり言っていた私に、じっと我慢してくれたのかもしれない。

入会手続きについて

日本地球化学会の会員数はここ数年、横ばいの状態です。学会発表、会誌への投稿は会員である必要はありませんが、なるべく多くの人に支えられてこそ学会の運営は成り立つので、現会員は積極的に会員増強をすすめて下さい。今年度から年会の際にも受けつけるようにいたします。また、学会事務センターおよび庶務幹事へお申し出下されば、申込用紙をお送りします。なお、入会の際には、推薦者の必要はありませんので、お気軽にお申し出下さい。庶務幹事：小椋和子（東京部立大学・理学部） 電話 03-717-0111（内線：340）

○会員現況

新入会員（1984年5月～8月）

佐野有司 東京大学理学部地殻化学実験施設
溝田智俊 九州大学農学部土壌学教室
荒井康司 出光興産（株）新燃料部
赤工浩平 石油資源開発（株）
樋口敬二 名古屋大学水圏科学研究所
松村 徹 東海大学海洋学部
君島克憲 埼玉大学工学部環境化学工学科
尹 順子 東京都立大学理学部
黒崎太郎 北海道大学水産学部分析化学講座
平井昭司 武蔵工大原子力研究所
卜部明子 東京大学理学部地殻化学実験施設

退会

小林重喜

除籍

梁根 達、五十嵐龍志、小泉正明、大友幸一、
岸本文男、佐川直史、下島 光、田中省三、
竹田 篤、千野光芳、浜野洋三、前川徳昭、
望月常一

ニュース記事や御意見をお寄せください

本ニュースは年3回（大体5月、9月、1月）発行されます。記事は横書き1行24字（用紙は自由）に書いていただければ助かります。次回104号は4月10日（木）4月下旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛、清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298 (54) 3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル（4F）
日本学会事務センター内
電話 東京03 (815) 1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 104

1985. V. 2

1985年度年会は筑波研究学園都市で開催

日時 10月17日（木）～19日（土）

会場 工業技術院共用講堂

内容 一般講演、ポスターセッション、課題講演
および特別シンポジウム。

課題講演・一般講演を通じ1人、1講演に限る（共同発表者としての重複は可）。2講演以上を希望される方はポスターセッションでお願いします。ポスターセッションのみの申込みも歓迎します。課題講演は下記4課題が企画されています。課題講演での発表希望者はコンピーナに連絡後、お申込み下さい。

課題1 海洋における炭素、チッ素、リンの地球化学

コンピーナ 北野康、鈴木敏

課題2 自然災害の予知・予測と地球化学

コンピーナ 小坂文子、脇田宏、安藤直行

課題3 宇宙・地球における有機化合物の進化

コンピーナ 下山晃、石渡良志

課題4 年代測定法における最近の進歩

コンピーナ 柴田賢、兼岡一郎

懇親会 10月18日（金）18時から工業技術院厚生センターB食堂（会場の隣り）にて、会費4,000円（学生3,000円）

講演申込締切 6月24日（月）必着

今回は Geochemical J. にプログラムを掲載するために英文で演題、著者名（完記する）、所属機関名（大学、研究所名）を下記の例にならって記入して下さい（必ずタイプする）。

〔例〕演題：How did barium titanate particulates stick together in the nebula?

発表者および所属機関名：

TSUKUBA Masao (Tsukuba Univ.)

YATABE Kenji (Hitachi Inst. for Geochem.)

SAKURA Hanako (Mito Electric Co.)

申込受付後、講演要旨用原稿用紙をお送りします。

講演要旨原稿締切 8月17日（土）

要旨集予約、懇親会、小集会申込締切 9月14日（土）

以上の申込には、必ず所定の用紙を用いて下さい。用紙のない場合はご請求下さい。また、本年は年会の円滑な運営を期すために参加費（日本地球化学会会員500円、非会員1,000円）をいただきます。参加費、要旨集代（予約販売3,000円、当日3,500円）、および懇親会費は9月14日までに御送金下さい。

小集会 希望の方はハガキで別途お申込み下さい。

申込先および連絡先

〒305茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3

工業技術院地質調査所技術部

1985年度日本地球化学会年会準備委員会

委員長 東野徳夫

電話 0298 (54) 3620

郵便振替 東京 8-179203

日本地球化学会年会

年会は日本地球化学会の主催、日本化学会の共催です。

地球化学会6月例会

と き：6月1日（土）14:00-16:00

ところ：東京大学理学部化学教室本館4階講義室

◎サンゴ礁および海水準変動をめぐる最近の話題

・サンゴ礁によるネオテクトニズムと古環境解析
小西健二（金沢大・理）

・海水準変動とハイドロアイソスタシー
松本英二 (地質調査所)

◎筑波の宿泊ご案内

申込記号 ホテル名 室種別一泊料金(円)

A	グランド東雲	シングル	6,800
		ツイン	6,300
B	学園桜井ホテル	シングル	6,800
		ツイン	6,300
C	ホテル・ニュー鷹	シングル	5,800
		ツイン	5,300

D 筑波研修センターシングル 4,000±

特 筑波第一ホテル シングル 10,000±

- 1) 料金は一泊朝食付一人料金(ツインは2人利用の場合)、税・サ及びツアーリストの手数料300円込み、但し「特」はルーム・チャージのみ。
- 2) A, Bは送迎バス・サービス(会場への往復)あり、(駅への出迎えはなし)
Cは会場まで徒歩約10分
D・特は送迎サービスなし、定期バス利用(かなり不便)又はタクシー利用(片道約1,200円)
- 3) 申し込みは第二希望迄記入して下さい。先着順に割り振り、定数を越えた場合は他にまわって頂く場合があります。
- 4) 申し込みの際、別紙用紙に記入、返信用封筒(宛名記入)を同封して下さい。

〒300 土浦市桜井町1丁目17-15 第7奈良ビル
近畿日本ツーリスト(株)土浦営業所 日本地球化学会
年会係

TEL 0298-22-1611(代) 担当者 池上 雅幸

5) 申し込み締切り 1985年9月15日

6) 手順

- a) 申し込みを受け付けると、予約証と振込用紙が返送される。
- b) 予約料一人2,000円を振り込む。
- c) 最終振込期間 9月30日、それまではキャンセル手数料500円
- d) それ以降は各ホテルの規定による。

1985年度地球化学・海洋化学若手セミナー

日 時: 1985年10月19日(夕方)~10月20日(昼)

場 所: 筑波研修センター

内 容: 大気科学および地球科学に関すること

連絡先: 気象研究所地球化学研究部 鈴木 敏

電 話: 0298 (51) 7111 内線619又は627

「学会会議の会員および推薦人の選出経緯」

第14期(1985年7月18日より)の学会会議の会員選出は、学会からの推薦に基づいて行なわれることになった。本会からの会員候補者(1名)は、第4部内に新設された地質科学総合研究連絡委員会(他学会からの会員候補者6名と共に調整をうけ、運がよければ会員として選出されることになる。この調整はやはり各学会から選出された推薦人(10名)が集まって行なう。というプロセスで会員が決められるのかなどの細かいことは分っていない。

本会では、1984年10月19日の総会(名古屋)において、今回限りという条件で、会員候補者および推薦人の選出を評議員会に委せることを決めた。このことを受けて、1985年2月2日の評議員会で、会員候補者として増田彰正氏、推薦人として北野康氏および松尾禎士氏の2人をそれぞれ投票により選出し、学会会議へ通知した。1985年5月20日から5月23日の間に推薦人の会合があり、恐らく上記期間内に会員が内定することになり、7月19日総会より任命される予定である。

今回の会員選出のさい、一定の取り決めあるいは慣行が生まれる可能性があり、次の会員選出(1988年)のときは、本会からの会員候補者および推薦人の選び方は今回とは違ったものになる可能性がある。(松尾禎士)



第29回 IGC 日本開催内定

第29回 IGC の開催国について、IGC-Steering Committee と IUGS-Executive Committee から選ばれた ad-hoc working Committee は、1985年2月上旬開催され、第29回(1992年)を日本、第30回(1996年)を中国とする結論をまとめた。この結論は、同2月6日、第26回 IGC の Secretary General, N. Bogdanov 氏が公開の席上報告した。

第29回 IGC の開催国は、公式には第28回 IGC-Council meeting (1989年、米国)において決定される。しかし、今回の ad-hoc Committee の結論は、実質的に決定と考えてよいと思われる。

(地質研連委員長 野沢 保)

日本地球化学会1986年・1987年度役員選挙の 立候補者および推薦候補者の届出について

1985年5月1日

日本地球化学会役員選挙管理委員会

本会会則により1986・1987年度役員の選挙を次の日程で行ないます。

立候補者・推薦候補者締切	7月31日(必着)
選挙公報・投票用紙・会員名簿発送	8月26日
投票締切	9月30日(必着)
選挙結果公表(総会)	10月18日

つきましては、下記により、会長・副会長・監事・評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名、副会長1名、監事1名評議員20名を選出します。
2. 立候補者の届出は、届書を立候補者自身が、Ⅰ) 本委員会に持参するか、またはⅡ) 本委員会宛に送付して下さい。

3. 推薦候補者の届出は、推薦候補者名と推薦者名を記した届書に、推薦候補者の承諾書をそえて、推薦者またはその代表者がⅠ) 本委員会に持参するか、またはⅡ) 本委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により次の方は次期評議員に選出することができません：
角皆静夫、椎川誠、一国雅己、小椋和子、小倉紀雄、田中剛、野津憲治、半田暢彦、兼島清
4. 第2項と第3項に記した以外の方法で届出が行なわれた場合には、届書をうけつけることができません。郵送の場合は、「書留郵便」として下さい。届書の封筒の表に(選挙)と記入して下さい。
5. 届出の締切は、1983年7月31日(必着)です。
6. 本委員会の所在地は次の通りです。
(〒305) 茨城県新治郡桜村
筑波大学化学系 野津憲治
(Tel 0298-53-2503又は2504)

会員名簿の作成

今回4年ぶりに名簿を作成することになりました。会員はもれなく同封のハガキに楷書で必要事項を記入の上 6月31日 までに到着するように投函して下さい。

記載上の注意

- (1) 氏名 漢字およびローマ字
- (2) 生年月日および男女の別(名簿には掲載しませんが学会の運営上必要とすることがありますので記載をお願いします。)

- (3) 勤務先 住所、電話および 機関名
(和文 および 英文)
機関名は○○大学 ○○学部 ○○教室
○立○○研究所 ○○部 ○課 ○室等
- (4) 自宅住所および電話 (都道府県から記入)
- (5) 最終卒業校および年度
- (6) 入会のおよその時期
- (7) 備考 1年以内に上記の記載に変更があると予想される時にはこの欄に変更事項を記入して下さい。なお、ここに記入されても変更がありましたらその時点で学会事務センターへ文書で連絡して下さい。

1985年度学術賞「地球化学研究協会・三宅賞」および研究助成金（若手研究者）

地球化学に顕著な業績をおさめた科学者に毎年贈呈されている（昨年度は小坂丈予氏が受賞）三宅賞の受賞候補者の推薦依頼、および地球化学に従事する若手研究者で海外シンポジウム等に出席し、論文を発表する者に対する助成金受領者の推薦依頼がありました。

研究助成金は1件10万円 yearlyに3件、メ切日において35才までの対象者に与えられます。メ切日は、三宅賞、研究助成金ともに1985年9月5日です。詳細は地球化学研究協会（〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217 電話03-330-2455）へおたずね下さい。

トヨタ財団 1985（昭和60）年度研究助成公募

「新しい人間社会の探求」を基本テーマとして、現代社会が抱えている諸問題の発見と解決および将来の人間性豊かな社会の構築を目指した研究に対する助成を行うむね案内が来ています。

応募期間：4月1日から5月31日
 申請用紙の申込：5月15日までに240円切手を同封し、申込みをする。
 詳細は 〒160 東京都新宿区西新宿2丁目1-1 新宿三井ビル37階私書箱236号 電話03-344-1701 財団法人 トヨタ財団 研究助成係 へおたずね下さい。

国際深海掘削計画（ODP）

1975年以来実施されていたIODP計画は終了し、今年から新たにODP（Ocean Drilling Program）が実施されることになった。計画の担当機関もScripps Institution of Oceanographyから、Texas A & M大学に移り、グローマーチャレンジャー号よりも掘削能力が高く、研究・居住域も大きな新掘削船「Joides Resolution（J/R）」がLeg101（本年1月）から就航している。日本は、本年10月から正式メンバーとしてODPに参加することが認められ、乗船研究や陸上での研究を募集中である。乗船希望者は、Cruise Participant Application Formに希望する仕事と航海番号を記入して、事務局に随時提出することになっている。掘削地点の提案も募集中である。これらの詳細は、ODP国内研究連絡会（事務局東大海洋研究所）発行の「ODPニュースレター」を参照いただきたい。ODP掘削航海スケジュールは以下の通りである。尚、化学関係としては、酒井 均（東大・海洋研）と脇田宏（東大・理）が委員である。

ODP 掘削航海スケジュール（1985・3・1現在）			
航海番号	出港	海域・主テーマ	
101, 1985年1・31（マイアミ）,	バハマ沖		
102,	3・19（マイアミ）,	西大西洋孔内計測	
103,	4・25（アゾレス）,	ガリシア海丘	
104,	6・19（ブレイマーハーベン）,	ノルウエー海	
105,	8月（スタバングル）,	ラブラドル海・他	
106,	11月（セントジョーンズ）,	MARK I*	
107, 1986年1月（マラガ）,	地中海チレニア海		
108,	2月（マルセイユ）,	北西アフリカ沖	
109,	4月（ラスパルマス）,	MARK II*	
110,	6月（バルバドス）,	バルバドス島北部	
111,	8月（パナマ）,	東太平洋海域13°N	
112,	10月（カヤオ）,	ペルー海溝	
113,	12月（バルパライソ）,	チリ海溝海膨	
114, 1987年2月（プンタアレナス）,	ウェデル海		

* Mid-Atlantic Ridge & Kane Fracture Zone の略、航海日程はしばしば変更になる。

ODP 長期計画

1987年2月～3月	ウェデル海（南極海域）
1987年春～秋	インド洋（含亜南極海域・紅海）
1987年12月～88年1月	ケルゲレン海台（南極海域）
1988年春～秋	インド洋東部～インドネシア海溝域
1989年7月	日本周辺海域へ
1990年夏	北東太平洋
1990年12月末	パナマ運河を通して大西洋へ

上記計画は全くの筋書きで、海域別航海数やテーマは、それぞれ各地域パネルや課題別パネルで審議中である。特に重点海域を季節によって押えたスケジュールにすぎない。掘削地点調査の進み具合によって、いったん採択された航海がとり消されることもある。

〈第4回ケムローン世界会議ツアー案内〉

標記会議が9月23日（月）～27日（金）、米国ウッズホールで開催されますが、参加者のために下記のようなツアーが企画されています。興味のある方は 〒100 東京都千代田区丸の内1-6-4日本交通公社海外旅行本社内支店「ケムローンデスク」 電話03（284）7586 担当：大西 へお問合せ下さい。

〈内容〉期間8日間、9月22日東京発～同日ボストン着、バスにてフォールモウスへ、（同地5泊）、帰路ニューヨークへ、（同地1泊）、9月28日（土）ニューヨーク発～29日（日）東京着

募集定員20名、最少催行人員10名、締切日8月22日（木）旅行代金（概算）552,000円

財政小委員会より

地球化学会の財政状態に赤信号がともしつつあることは、数年前から指摘されており、1982-83年度評議員会内に設置された財政小委員会は会費値上げが避け難いことを、本ニュース、No. 96, p. 10（1982）を通じて訴えました。1982, 83, 84年度は、値上げを回避し、わずかな増収策と支出の節約につとめ、繰越金を使うことで何とか凌いできました。しかし、1984年度から1985年度への繰越金が100万円少々と、恐らくここ10年間で最低となり、財政問題は思い切った策を打つ必要に迫られてきました。

この問題を検討するため、1984-85年度評議員会にも財政小委員会を設置することが、1984年10月17日の評議員会で決まり、委員長に増田副会長、委員に鳥居監事 小椋、清水、野津各評議員が委嘱されました。財政小委員会では、1984年11月と1985年2月に会合をもち、財政問題の現状を把握しその検討を行いました。

ここ数年間の収支状況は、単年度では、毎年約100万円の赤字になっています。これは、会員数が横ばい状態のため会費収入が増加せず、刊行物売上、文部省助成金も横ばいであるにも拘らず、支出は物価上昇によって年々増加しているからです。健全な財政運営を行うためには、単年度でわずかながら黒字を残せ、常にある程度の財政的余裕があることが必要です。この点現在の地球化学会の財政状態は正に破産寸前と言えます。

財政状態を向上させる方策としては、収入増と支出減としかありません。まず、収入増加策として、会員数の大幅な増加と刊行物購入機関の大幅な増加が現状ではあまり望めませんので、①会費の値上げ ②刊行物の単価の引き上げ ③別刷代金の引き上げ ④刊行物への広告の掲載、があげられます。①の場合1,000円値上げで年間80万円増収、②ではGeochem. J. を現行2,800円から3,400円に改訂して年間65万円の増収が見込まれます。また、現在の事業内容を縮小させない前提にたった支出削減策としては ①印刷発注先の見直しによる出版費の節減 ②出版物の同時送付による郵送料の削減 ③評議員会、幹事会のための旅費、会議費の削減 が考えられます。③の旅費は、今年度からは今までよりさらに切り込み、幹事会はなし、評議員会は関東地区以外の人に限り半額支給に改めました。

このような検討の上にたち、財政小委員会は、評議員会に対し以下の2点の答申を行ないました。

1. 1977年以降据え置かれていた会費を、正会員8,000円（現行6,000円）、学生会員6,000円（現行4,000円）、入会金2,000円（現行1,000円）に値上げ

する。但し、賛助会員会費は現行通り。

2. Geochem. J. 販売価格を1986年度から3,400円（現行2,800円）、1988年度から4,000円に値上げし、「地球化学」も1986年度から2,500円（現行1,800円）に値上げする。

また、別刷代金の値上げも検討されておりますし、本学会刊行物への広告掲載は、増田副会長を委員長とする新たな委員会を設けて促進することになりました。答申通り実行されますと、年間収入額は現在と比べて1987年までは225万円、1988年度以降は290万円増え、支出が毎年前年度に比べて50万円ずつ増加すると仮定しても、少くとも数年間は健全財政が維持できることが期待されます。



・名誉会員の推挙

会則に従い、小穴進也氏の名誉会員の推挙が総会にはかられ、満場一致で承認された。

小穴氏は日本地球化学会の前身の地球化学研究会の創設以来、地球化学の発展に貢献され、副会長を2期、会長を2期つとめられた。また、Geochemical Journalの創刊にあたって、その提案者であるとともに発行に盡力された。現在も継続して同誌の英文の校閲を一手に引受けていた。いっている。

総会の後に開催された懇親会の席上で松尾禎士会長より名誉会員証が手渡された。

・会則の改正（第5条）

会則第5条 本会に入会を希望する者は、正会員1名の紹介により、所定の入会申込書を本会事務局へ提出する。の条文のうち、正会員1名の紹介によりを削除する。

・学術会議会員候補者の選定

会長より同会員候補者および推薦人の選定を評議員会に委任して欲しいとの提案がなされ、承認された。

将来計画委員会アンケート雑感

——ニュース102号では会員の研究分野（問8）、日本の地球化学の特徴（問9）、立ち遅れている分野（問10）、推進すべき分野（問11）等について会員諸兄姉の御意見をいただきました。その概略は103号で報告しましたが、ここではそこに十分盛り込めなかった御意見の一つを紹介します——

問9、問8の分類法、「対象別」にもあらわれているように、問題意識が「物」の中だけに留っていて、他の「現象」を研究対象と考えている分野との対話を困難にしている。この日本地球化学の特徴は、研究の範囲を特殊な狭い部分に限定させ、一般化や発展性に対する妨げとなっている。

問10、問11、この質問の内容から想像すると、質問者は、暗に、日本の地球化学には立ち遅れた分野があり、それを補強することによって、将来が開けると言わんとしていると思われる。しかし、問8の分類法と年会プログラムを合わせ見ると、どの対象分野でも種々の機器を用いた多くの研究が発表されており、研究者数、手法（＝機器）とも十分備っており、特定の分野の立ち遅れを感じさせる何者もないのは明かである。それにも拘らず、質問者が日本の地球化学に「問題がある」と考えているのであれば、この問題は特定の分野の立ち遅れといった種類のものではなく、より本質的に、日本の地球化学の体質にからんだ問題ではなからうか。

塑って、問8の分類法について見ると、たとえば、対象が宇宙——たとえば太陽系の起源といった「現象」で、それを明かにする手法が鉱物や結晶や地球の岩石中の元素・同位体の分布であり、問8の表の「手法」は単に便宜的に使用する機器にすぎない場合は明かに除外されている。地球化学の研究に於いて、個人の研究目標が常に「現象」にあるべきだとは思わないが、科学の元来の研究目的は「現象」にあるのが普通である。化学の特殊事情として、「物」を通してしか「現象」を見る方法がない事実を、「物」が究極的な研究対象であると勘ちがいする危険が、化学の研究には常につきまとっている。

「現象」を研究の対象とする立場をとると、現状では、年会プログラムに見られる多くの研究は「地学」や「惑星科学」、「海洋学」などに帰属されることになるであろう。しかし、元来、地球化学独自の問題がなかったわけではなく、日本の地球化学界においても、天然の系での元素や同位体の分布や動き、同位体を用いた年代測定法、地学的温度・圧力計の開

発などの研究が広く行われて来た。「立ち遅れ」を感じるのは、研究が進み、成果が蓄積された結果、それらの分野が、もはや研究の対象を与えなくなりつつある事実に対して焦燥をいだいているに過ぎない。この焦燥をとり去るには、新しい研究対象を産み出す以外にない。すでにその芽生えがあるなら、アンケートなどせずにも将来計画委員が容易に指摘できるはずである。個人の努力をアンケートによって地球化学会が吸い上げようというなら、いかにも虫の良すぎる話ではないか。立ち遅れを心配するより過去の成果を楽しむべきであろう。

新しい研究の芽生えは個人の問題である。将来計画委員会が何か出来るはずがない。しかし、過去の成果がどのように利用されているか、利用されて行くかについて考えることはできる。科学の歴史を見れば、より一般的な問題の成果は、より特殊的・応用的な個別の問題へ利用される段階へ移っている。日本の地球化学が産み出した天然の同位体分布・希土類などの微量元素の分布の規則性などの重要な結果が、他の分野で充分活用されているであろうか。研究結果が他の科学の分野で充分活用されるためには、他の分野の研究者との対話を通じる必要がある。「物」にこだわっていると、「現象」を対象とする研究者とばかりでなく、異なる対象物を研究する者との対話さえも通じにくくなるのは学会や研究会でしばしば出合うことである。現在、学会として必要としているのは、立ち遅れた分野を探すなどという事ではなく、「物」を通じて「現象」を見る目を持った研究者の数を増すことではなからうか。それも、具体的にそういった方策がとれるとしての話である。

私には具体的な提案はない。しかし、特別に政治的意図がないのなら、抽象的な問題しか議論できない委員会に力をそそぐのは学会として全く無駄な努力である。なるべく、ゼイ肉を切って、学会誌 *Geochem. J.* の世界的学会誌としての発展に出来るだけの力をそそぐべきだと思う。



小沼直樹さんを偲ぶ

東工大 松尾領士

1985年1月15日、茨城大学教授の小沼直樹さんは自らの命を絶たれました。49才の若さでした。小沼さんを知る人々への衝撃は計り知れません。個人ばかりだけでなく、日本の地球化学への衝撃と損失は評価のしようがないくらいです。私はお葬式に参列したにもかかわらず、小沼さんの肉体はもはやこの世に存在しないのだという事実を仲々認めることができません。小沼さんに「何故？」と問いかけられない以上、われわれがなぜこんなに悲しむのかという理由を、小沼さんが辿ってこられた道を振り返りながら以下にのべようと思います。

小沼さんは東京教育大学において浜口博教授の指導のもとで、「陽イオン交換クロマトグラフィーによる希土類元素の分離」と題する研究により1964年理学博士の学位を取得されました。この純粹に分析化学的な研究は後年の小沼さんの地球化学の研究の技術的基礎となりました。学位取得時にすでに論文は10篇ほど出版されていました。1964年浜口教授が東大の化学教室へ移られた機会に、小沼さんは東大の助手としてプロの研究者の第一歩を踏み出されました。東大へ移ってから力を入れられた小沼さんの仕事は、どんな微量元素でも自然界では一定の法則に従って挙動するという思想を実際に検証すべく、松井義人氏、長沢宏氏、脇田宏氏、樋口英雄氏らの同志と語らって「アラユルニウム」プロジェクトを開始され、一連の成果は1976年に集大成され、日本の地球化学の実力を世界に向けて示されました。このプロジェクトの事始めと経過および成果は改めて活字としてわれわれが読むことができるであります。

私として忘れることができないのは1966年に京都大学の湯川記念館で開催された、太陽系の形成に関する本格的なシンポジウムに小沼さんと一緒に出席した時のことです。湯川先生をはじめ林忠四郎・早川幸男・部城秋穂・武谷三男教授らの自由で真剣な討論を聞いたときの小沼さんは、正に鬼でした。後から後から湧いてくる小沼さんのアイデアは止まる所を知らず相手をした私の理解が追いつけないくらいでした。この時の興奮をもとに、小沼さんと私は地球の形成にあづかった物質は炭素質コンドライトのタイプⅢと同質であるという考えを一気に書き上げ、この論文は岩波の科学に1967年に掲載されました。

翌1968年 Chicago 大学の Clayton 教授の所へ赴いた小沼さんは、彼の才能を更に開花させました。酸素の同位体比を用いて、各種の隕石の平衡生成温度を大胆

な仮定と明快な論理によって求めることに成功したです。この結果は Anders のグループによる微量元素温度計による結果とよい一致をみたこともあって全世界の強い関心をよびました。小沼さんの結論は、それが発表された直後、太陽系の酸素同位体の不均一性が発見されたため、そのまゝの形では維持できなくなりましたが、小沼さんの「Cosmothermometer」の論文を読んで地球化学・宇宙化学に志ざす若い人達が出ることを信じて止みません。かく言う私は Brown と Patterson の隕石の母天体に関する1949年の論文を読んで、本格的に地球化学に志ざす決心をしました。

小沼さんは太陽系の始源物質に関する上述の重大発見の渦中の常に中心にありました。1970年に帰国されるや、わずか4ヶ月で「宇宙化学」という本を書き上げ、それは1972年1月に講談社から出版されました。この本で小沼さんはギター片手のシンゲソングライターよろしく、隕石の面白さ、奥深さを語ってくれました。この本を読むと小沼さんが鬱病になるなどということは想像もできません。

1972年に東京学芸大学、1975年に筑波大学、1981年に茨城大学へ移られた後も小沼さんの没頭と献身は続きます。普通の研究者は学位論文を超える質の仕事を生涯の間にすることは希な上に、外国で大当たりをとった仕事に執着しなかった小沼さんはやはり一頭地を抜いた研究者でした。小沼さんは岩石進化のあとづけ一古くて新しい地球化学の王道一の研究へ転身しました。伊豆諸島の岩石からはじまって、南へ下る島々の岩石、さらには自ら組織したグループと共に採取したアンデス山系の岩石の誕生のいきさつの研究はまだ完成途上のものでした。この研究の武器は Sr/Ca と Ba/Ca でありました。小沼さんは外にむけてこの研究の話をするとき、Sr と Ba を使うことからエスビーカラーといっていました。この仕事は小沼さんの頭の中では比較惑星学に通じる壮大な研究の一部として位置づけられていたように思われます。

小沼さんは疑いもなくアースサイエンスの巨峰です。そしてインスピレーションがパースペクションを上廻ることが地球化学でもありうることを示した人です。日本地球化学会が小沼さんを雑事でわずらわしたことは本末転倒で、小沼さんにこそ日本のいや世界の地球化学の推進役として専念していたべからうように学会として努力すべきでした。日本では学問の出来る人をよってたかって雑事でつぶしにかゝります。私共は小沼さんを失ったことを悲しんでいます。今こそ小沼さんは天国で、しめしめこれで好きなことに専念できるぞとほくそえんでほしいと思います。

1984年度日本地球化学会総会報告

総会次第

1. 開会宣言
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会委員長挨拶
5. 名誉会員の推挙(5ページに掲載)
6. 1983年度事業および決算報告
7. 1984年度事業および会計中間報告
8. 1985年度事業計画および予算案
9. 会則の改正(第5条)(5ページに掲載)
10. 学術会議会員候補者の選定(2ページ, 5ページに掲載)
11. 閉会

総会は10月19日, 15時より16時まで名古屋大学工学部において会員約50名出席のもとに開催された。議長に柴田 賢氏(地質調査所)が選出され, すべての議事は承認された。

1983年度 事業報告

1. 会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1982年12月31日	858	12	3	873
入会	32	0	0	32
退会	18	0	1(逝去)	19
1983年12月31日	872	12	2	886

2. 年会, 委員会等開催数

年会 1回(10/17-19, 東京), 総会 1回(10/18, 東京), 例会 2回(2/12, 6/11, 東京), 評議員会 4回(2/12, 6/11, 10/16, 12/17), 幹事会 2回(4/9, 9/22, 東京), 財政委員会 5回, 会誌編集委員会 2回, ニュース発行委員会 3回, 行事委員会 2回, 選挙管理委員会 2回

3. 会誌発行

G. J. Vol. 16 (4, 5, 6,), Vol. 17 (1, 2, 3, 4,)
地球化学 Vol. 16 (2), Vol. 17 (1)

4. ニュース発行

Nos. 97, 98, 99, (計22ページ)

5. 学会主催, 共催

第4回水—岩石相互作用国際集会(8/29-9/3, 主催), 第20回理工学における同位元素研究発表会(7/4-6, 共催)

6. 例会

2/12 自然界における拡散現象

- 1) 深海底堆積物 大隅多加志氏
- 2) 造岩鉱物 森岡正名氏

6/11 考古学と地球化学の接点

- 1) 貝塚産貝殻の酸素同位体組成 小池裕子氏
- 2) 青銅器と鉛同位体組成 馬淵久夫氏

1983年度決算報告書

収支決算書(自1983年1月1日至1983年12月31日)

収入の部	
会費	5,065,606円
正会員	4,587,000
学生	148,000
賛助	180,000
海外	113,606
入会金	37,000
刊行物	3,134,807
Back No.	3,044,680
別刷	90,127
助成金	1,560,000
雑収入	72,962
名簿積立	250,000
繰越	5,058,719
計	15,142,094円

支出の部	
事業費	
出版	9,163,302円
印刷	7,566,112
編集	900,000
発送	697,190
行事	250,000
名簿積立	500,000
会員業務委託	1,435,910
会員業務郵税	152,460
事業費計	11,501,672円
管理費	
庶務	300,000
会議費	233,691
通信費	7,770
旅費	354,500
雑費	85,690
保管料	171,600
管理費計	1,153,251円
次期繰越	2,487,171円
計	15,142,094円

貸借対照表(1983年12月31日現在)

資産の部	
現金	7,157円
預金	1,830,870
学会センター	4,939,694
資産合計	6,777,721円
負債・正味財産の部	
負債	4,290,550円
未払い金	901,550
前受け会費	2,889,000
名簿積立	500,000
名簿積立	500,000
正味財産	2,487,171
負債・正味財産合計	6,777,721円

1984年度 事業中間報告(1984年9月30日現在)

1. 会員現況(1984年8月末現在)

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1983年12月31日	872	12	2	886
入会	21	0	0	21
退会	30	0	0	30
(13名は除籍)				
1984年8月末	863	12	2	877

2. 年会, 委員会等開催数

年会 1回(10/18-20, 名古屋), 総会 1回(10/19, 名古屋), 例会 2回(2/25, 6/16, 東京), 評議員会 3回(2/25, 6/16, 10/17), 幹事会 2回(4/4, 9/8, 東京), 会誌編集委員会 2回, ニュース発行委員会 3回, 行事委員会 2回, 将来計画委員会 3回

3. 会誌発行

G. J. Vol. 17 (5, 6), Vol. 18 (1, 2, 3)
地球化学 Vol. 17 (2), Vol. 18 (1)

4. ニュース発行

Nos. 100, 101, 102 (計32ページ)

5. 学会主催, 共催

第21回理工学における同位元素研究発表会(7/2-4 共催)

6. 例会

2/25 高温の初期海洋にまつわる2, 3の問題

日本地球化学会会長 松尾禎士

6/16 液相不混和領域における元素の分配

1) ケイ酸塩メルト間の元素の分配

氏家 治氏

2) ケイ酸塩メルトと流体相間の元素の分配

浦辺徹郎氏

1984年度会計中間報告(1984年6月30日現在)

収入の部		
科目	金額(円)	(予算, 円)
1. 会費収入	4,532,250	[5,000,000]
2. 刊行物売上	2,208,647	[4,100,000]
3. 広告料	0	[100,000]
4. 助成金	0	[1,600,000]
5. 雑収入	37,155	[60,000]
6. 名簿積立金	500,000	[500,000]
7. 基本財産充当金	0	[1,000,000]
8. 前期繰越金	2,487,171	[3,400,000]
計	9,765,223	[15,760,000]

支出の部		
科目	金額(円)	(予算, 円)
1. 事業費		
1.1 出版費	3,976,708	[9,000,000]
会誌印刷	3,038,408	
編集費	900,000	
発送費	38,300	
1.2 行事費	42,000	[320,000]
1.3 名簿積立金	750,000	[750,000]
1.4 事務委託費	480,000	[1,400,000]
1.5 会員業務郵税	0	[170,000]
事業費小計	5,248,708	[11,640,000]
2. 管理費		
2.1 庶務費	0	[300,000]
2.2 会議費	79,425	[200,000]
2.3 通信費	0	[50,000]
2.4 旅費	285,500	[400,000]
2.5 雑費	40,280	[100,000]
2.6 保管料	0	[187,200]
管理費小計	405,205	[1,237,200]
3. 基本財産充当引当金	0	[1,000,000]
4. 次期繰越金	—	[1,882,800]
計	5,653,913	[15,760,000]

1985年度 事業計画

1. 年会 1回
2. 総会 1回
3. 例会 2回
4. 評議員会 4回
5. 幹事会 2回
6. 会誌発行
G. J. Vol. 19 (1-6)
地球化学 Vol. 19 (1, 2)

7. ニュース発行
3号 (Nos. 103-105)
8. 名簿発行
9. 学会主催、共催
 - 1) International Seminar on Laterite (IGCP PROJECT)
Oct. 14-17 (1985) (共催)
 - 2) 第22回理工学における同位元素研究発表会 (共催)
10. 選挙
11. その他

1985年度 予算

収入の部		
科目	金額(円)	(前年度予算案, 円)
1. 会費収入	5,000,000	[5,000,000]
2. 刊行物売上	4,300,000	[4,100,000]
3. 広告料	100,000	[100,000]
4. 助成金	1,600,000	[1,600,000]
5. 雑収入	40,000	[60,000]
6. 名簿積立金	750,000	[500,000]
7. 国際会議預金利息	570,000	[0]
8. 基本財産充当金	0	[1,000,000]
9. 前期繰越金	700,000	[3,400,000]
計	13,060,000	[15,760,000]

支出の部		
科目	金額(円)	(前年度予算案, 円)
1. 事業費		
1.1 出版費	9,000,000	[9,000,000]
会誌印刷	7,400,000	
編集費	900,000	
発送費	700,000	
1.2 行事費	270,000	[320,000]
1.3 名簿積立金	0	[750,000]
1.4 名簿作成費	600,000	[0]
1.5 事務委託費	1,450,000	[1,400,000]
1.6 会員業務郵税	370,000	[170,000]
事業費小計	11,690,000	[11,640,000]
2. 管理費		
2.1 庶務費	200,000	[300,000]
2.2 会議費	150,000	[200,000]
2.3 通信費	30,000	[50,000]
2.4 旅費	400,000	[400,000]
2.5 選挙費	100,000	[0]
2.6 保管料	171,600	[187,200]
2.7 雑費	100,000	[100,000]
管理費小計	1,151,600	[1,237,200]

3. 基本財産充当引当金	0	[1,000,000]
4. 次期繰越金	218,400	[1,882,800]
計	13,060,000	[15,760,000]

1984年度 第2回 日本地球化学会評議員会議事録

日時：1984年6月16日 17時～21時

場所：赤門学士会館

出席者：松尾禎士会長、増田彰正副会長、安部喜也、一國雅巳、小椋和子、小倉紀雄、佐藤和郎、清水 洋、鈴木 款、田口一雄、田中 剛、角皆静男、野津憲治、半田暢彦、松久幸敬、脇田宏、各評議員
(大隅多加志：議事録作成のため陪席)

I. 前回議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 庶務 (小椋評議員)

* 4月4日の幹事会でG.J. 別刷代金改訂および本会入会手続についての会則改訂について討議した。10月の評議員会にこの2件について提案する予定である。

* 昭和59年度の文部省研究成果刊行費補助金が157万円と内定した。

2. 会計 (野津評議員)

* 「基本財産充当金」の扱いについて監事と協議したが結論にいたっていない。

3. 行事 (松久評議員)

* 1984年6月例会を6月16日午後実施した。「液相不混和領域における元素の分配」のテーマで氏家・浦辺両氏の講演、27名の出席で、熱心な討論がおこなわれた。

4. 将来計画 (角皆評議員)

* 本年度の年会でシンポジウムを予定している。

5. 学術会議関係 (増田副会長)

* 5月27日の学協会との懇談会に出席した。「学術研究団体登録規則」の内容について説明があった。本会は登録資格の基準を満足している。

6. 編集

(一國評議員) G.J. は、Vol. 18, No. 2印刷見本の段階、2ヶ月遅れ。No. 3半分印刷済み。なお、1984年分の実績は、38編受付、うち15編採用、18編審査中、5編却下。

(小倉評議員) 「地球化学」18巻1号編集中、この6ヶ月の投稿4編、2編採用、1編却下、1編審査中。

さらに6編ほど欲しい。2号は、年会のシンポジウム、課題討論から特集をくみたい。

(田中評議員) ニュース101号を発行した。102号は、原稿締め切り8月10日、年会プログラムを掲載予定。

7. 年会 (半田評議員)

* ニュース101号掲載のとおり、10月18日(木)～20(土)、名古屋大学工学部で開催。19日午後は、シンポジウム・総会・特別講演、晩に懇親会を予定。評議員会は、10月17日夜、王山会館。

III. 議事

1. 日本放射線技術協会からの「学会発表・雑誌投稿に会員資格を要するか否か」のアンケート回答に関して (小椋評議員)

* 本会では「会員に限る」という制限はしていないことを確認。「地球化学」誌上の投稿規定からも、「会員に限る」旨の文言を削除することとした。

2. 年会講演申込締切期日について (脇田評議員)

* 申込者側で期日を遵守すれば、どれほど現行よりおくらせることができるか、また、「化学と工業」誌9月号にプログラムを掲載することの意義、などを、討議。今年度は、講演申込期日遵守の状況につき実態調査をすることとした。

3. 入退会 (小椋評議員)

* 入会者12名および退会者16名を承認。

会員現況

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1983年12月末	872	12	2	886
入会	10	0	0	10
退会	16	0	0	16
1984年4月末	866	12	2	880

* 前回幹事会で協議した5年以上会費滞納者の除籍については、次回評議員会に、継続審議となった。

4. 「日本の地球化学の研究と動向」(仮称)の取りまとめ、およびシンポジウムについて (増田副会長)

* 本会として取り組むことで、文部省から予算がとれそうであることを踏まえての提案であるとの説明。

(1) 諸外国との比較、国内での状況、などを中心に東京でシンポジウムを持つこと、(2) 年会でのシンポジウムのまとめと合わせ、本会としての公式的な見解とみなされるパンフレットを作成すること、の方針を決定。具体化の準備を、会長・副会長に一任。

5. 年会シンポジウム (角皆評議員)

* 角皆評議員の原案にもとずき討議。「(1) 地球化学研究の動向 (現状と今後の重要研究課題)」各分野担当ならびに (2), (3) の内容・発言者・座長について、具体的に候補の名を挙げて議論した。

6. 本会内の active group への援助について (松尾会長)

* 鈴木評議員からの「若手の会」への資金援助の要請をうけて、評議員会で議論してほしいと、会長より発言。財政状態から考えて当面、資金援助という形でルール化するのは、難しいだろう。チューターを評議員レベルでかってくるなどの対応しか当面無かろう。との意見が出された。

7. 日本学術会議会員候補者について (松尾会長)

* 「本会からの候補者決定は評議員会で、おこないたい、自薦をうけつけない」旨、提案。本会からの候補者が会員になれる可能性、他学会との連携の可能性など議論され、決定は、早期に行なったほうが有利であろうとの判断が、大勢をしめた。

* 「臨機応変に対応するため、会長に一任。ただし、評議員による書面投票の、手続きをふむこと」との動議が提出され、これについて挙手による採決。(途中退席の田口・半田両評議員を除く全員14名の賛成で可決。)

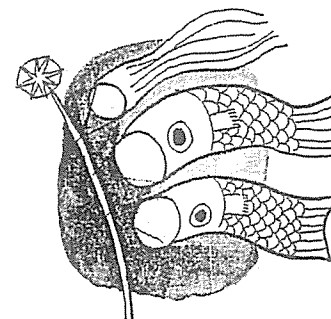
* 引き続き、本会よりの日本学術会議会員推薦人を、無記名投票で選出。松尾会長(得票数：13、白票1)に決定した。

8. その他

* 名誉会員推薦の件。田中評議員作成の資料「役員経験者一覧」をもとに、幹事会で検討することとした。

* 1985年度年会開催地について、行事担当の松久評議員に、検討していただくこととした。(筑波地区が有望。)

(以上)



日本学術会議鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会報告

この度、日本学術会議第4部鉱物学研究連絡委員会付置として新たに鉱床学専門委員会が設けられ、過日第1回委員会が開かれて委員長、幹事、委員担当などが決められた。なお、現委員の任期は学術会議第12期延長期間(昭和60年7月18日まで)である。

この専門委員会は、研究連絡委員会が広い領域を対象に設定されているため複数の領域に細分して研究連絡を図ること、および国際学術組織に対応するナショナル・コミティが関連研究連絡委員会と連絡協議しつつ活動することを目的に設置されたもので、実質的運用については研究連絡委員会に準じた扱いを受けることになっている。

委員会は日本鉱山地質学会、日本岩石鉱物鉱床学会、日本鉱物学会、日本地質学会、日本地球化学会から推せんされた委員および学術会議会員の計10名により構成され、広義の鉱床学に関する研究計画の立案、研究条件の整備などの審議をおこなうほか、国際鉱床学連合(International Association on the Genesis of Ore Deposits. IAGOD)への対応も行。委員会の英文名はSectional Committee for Science of Mineral Deposits(仮称)とした。

今期委員は下記の通り。

委員長 荻木浅彦(東北大・理)
幹事 砂川一郎(東北大・理)、田口一雄(国内関係:東北大・理)、武内寿久弥(国際関係:東大・工)
委員 飯山敏道(東大・理)、石原舜三(地調)、兼平慶一郎(千葉大・理)、島津光夫(新潟大・理)、広渡文利(九大・理)、松久幸敬(地調)(日本地球化学会推薦委員)

IAGOD各種委員会に対応する国内委員は下記の通り選出された。

COFFI (Commission on Ore-Forming Fluids in Inclusions) 武内寿久弥

CTOD (Commission on Tectonics of Ore Deposits) 中村威

Commission on Manganese 針谷宥

Commission on Paragenesis 島敏史

Working Group on Skarn Deposits 飯山敏道

他の委員会に対応する国内委員は未定。

(鉱床学専門委員会幹事)

——筑波の風——

今年の年会の準備も会合を重ねること7回、ほぼその全体が固まってきました。今回は講演にゆとりを持たせるために口頭発表を1人1回に限らせていただきました。2講演以上を希望される方のために、ポスターセッションを設けました。もちろん、ポスターセッションでの発表だけでも歓迎致します。

広く開かれた地球化学会の中で会員である利益を考えた結果、非会員からは1,000円、会員からは500円の参加費をいただくことになりました。そして出費増とならないよう要旨集(予約価)を500円値下げしました(予約価3,000円、当日価3,500円)。

筑波科学万博も春休み、連休を過ぎ、いくらかゆったりと見学できるようになったようです。心配された学会期間中の宿もほぼ昨年なみの料円で提供される見通しです。学会に不慣れな事務局ゆえ、不自由をおかけする事もあるかと思いますが、できるだけ早い時期に講演申込、要旨集原稿の送付、参加申込をしていただければ幸いです。

ニュース記事や御意見をお寄せください

本ニュースは年3回(大体5月、9月、1月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回105号は8月5日/切、8月下旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛、清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298 (54) 3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03 (815) 1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 105

1985. IX. 2

1985 年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会

日時 10月17日(木)~19日(土)

会場 工業技術院筑波研究センター共用講堂(茨城県筑波郡谷田部町)

大会準備委員会 地質調査所 技術部 東野徳夫

(茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3) 電話0298 (54) 3620

会場		9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
17日 (木)	A	受 付	一般講演 (海洋化学)				課題講演Ⅰ (海洋におけるCNPの地球化学)					
	B		一般講演 (環境・陸水)				課題講演Ⅱ (自然災害の予知・予測と地球化学)					
	C		一般講演 (有機地球化学)				課題講演Ⅲ (宇宙・地球における有機化合物の進化)					
	D		一般講演 (地殻・マントル)				課題講演Ⅳ (年代測定法における最近の進歩)					
18日 (金)	A		一般講演 (海洋化学)				特別シンポジウム		総会		懇親会 (厚生センター食堂)	
	B		一般講演 (岩石-水反応・その他)									
	C		一般講演 (有機地球化学)									
	D		一般講演 (年代測定・岩石標準試料)									
19日 (土)	A		一般講演 (堆積物・海水準変動)			ポ ス タ ー セ ッ シ ョ ン 討 論 時 間	一般講演 (炭酸塩)					
	B		一般講演 (大気)				一般講演 (陸水)					
	C		一般講演 (軽元素・希ガス同位体)				一般講演 (有機・生物地球化学)					
	D		一般講演 (地球外物質)				一般講演 (火山ガス・地熱水)					

講演時間:一般講演は討論を含めて15分、課題講演はコンビーナの指示による。

懇親会:10月18日(金)17時30分より厚生センター食堂にて行なう。

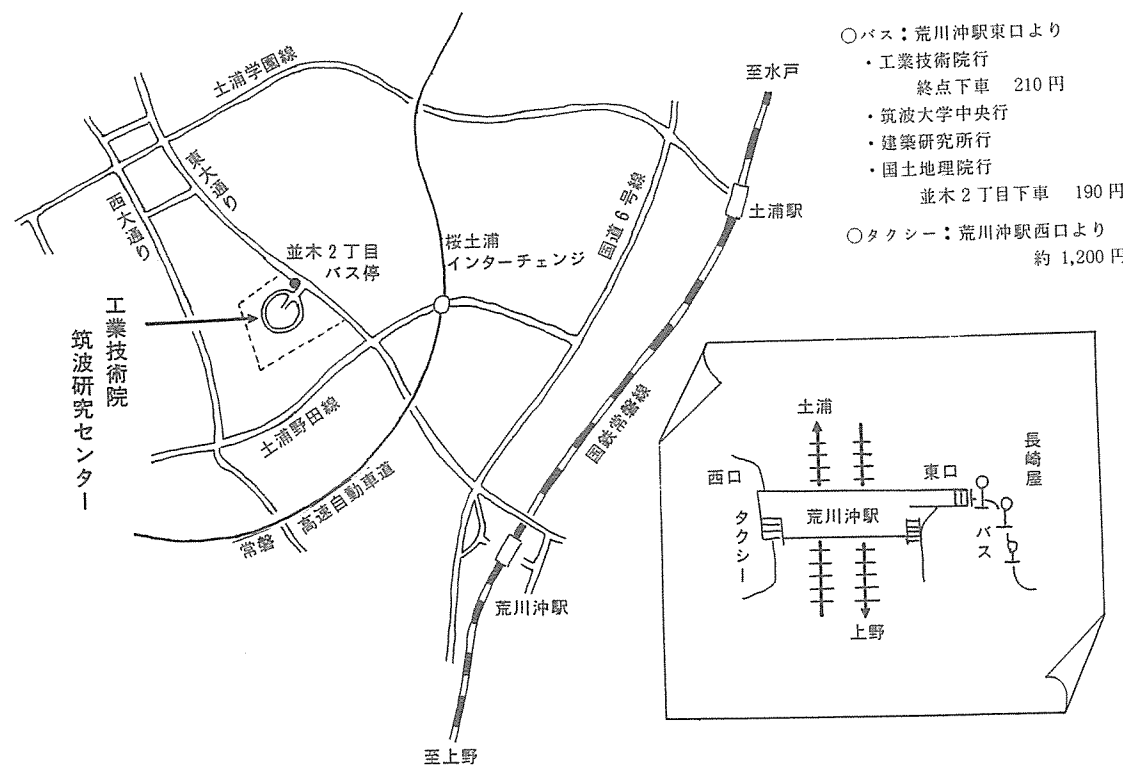
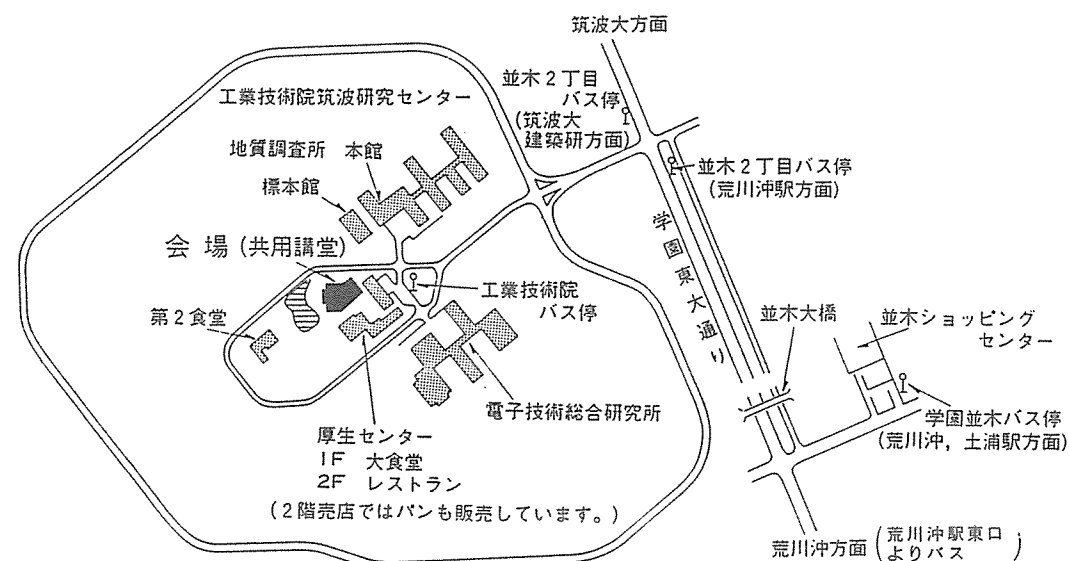
会費 4,000円(学生3,000円)

会場案内図

会 場 工業技術院共用講堂

「電話 0298-54-2095

ただし、10月 17 日～19日 9:00-17:00 の間



- 2 -

第1日 10月17日 (木)

A会場

一般講演 (9:30~10:15) 座長 松本英二

- 1 A 01 瀬戸内海沿岸における重金属の分布と挙動
(I) ○坪田博行・下島公紀・道嶋正美・
三宅 寛 (広大総合科学・神戸商船大)
- 1 A 02 瀬戸内海沿岸における重金属の分布と挙動
(II) ○下島公紀・早瀬光司・坪田博行
(広大総合科学)
- 1 A 03 天然水中のヒ素の微量定量 ○橋本品夫・
金森 悟 (名大水圏研)
(10:15~11:00) 座長 野崎義行
- 1 A 04 伊豆・小笠原海溝底層水の過剰ラドン-222
分布 蒲生俊敬 (東大海洋研)
- 1 A 05 親潮域海水中の ^{14}C 渡辺修一・○本多
牧生・角皆静男 (北大水産)
- 1 A 06 東シナ海および黒潮海水の高分子鉄, 炭素,
窒素化合物 ○杉村行勇・鈴木 款 (気象研)
(11:15~12:30) 座長 鈴木 款
- 1 A 07 樹木年輪の ^{14}C 濃度による大気-海水間の
 CO_2 交換速度の推定 ○中村俊夫・中井
信之・木村雅也 (名大 R. I. センター・理)
- 1 A 08 西部北太平洋における N_2O の濃度及び窒素
同位体比の鉛直分布 ○森本はじめ・才野敏
郎・服部明彦・和田英太郎・吉田尚弘 (東工
大理・東大海洋研・三菱生命研・富山大理)
- 1 A 09 海洋における有機物の鉛直輸送に対する大型
粒子の重要性 ○松枝秀和・半田暢彦 (名大
水圏研)
- 1 A 10 南極海における沈降粒子及び懸濁粒子の有機
物組成 ○八木一行・半田暢彦・松枝秀和
(名大水圏研)
- 1 A 11 海洋での物質循環に果す沿岸・近海域におけ
る生物生産の役割 角皆静男 (北大水産)

課題講演Ⅰ [海洋における炭素、窒素およびリンの地球化学]

コンビーナー 北野 康・鈴木 款

(13:30~14:20) 座長 角皆静男

- 1 A 12 C, N, P の地球化学的物質循環からみた天然水存在酵素活性の意義 藤原祺多夫 (東大理)
- 1 A 13 海洋における粒状有機窒素の生物地球化学的役割 才野敏郎 (東大海洋研)
- (14:30~15:20) 座長 小倉紀雄
- 1 A 14 東部瀬戸内海におけるプランクトンをめぐる C, N, P の循環 門谷 茂 (香川大農)

- 1 A 15 懸濁粒子及び沈降粒子の有機物組成の特徴
田上英一郎（神戸大自然科学）
(15:30~16:20) 座長 杉村行勇
- 1 A 16 外洋水及び沿岸水中の溶存有機窒素の鉛直分
布について ○米田義昭・築田 満（北大水
産）
- 1 A 17 海水中の溶存有機炭素および窒素の分布と意
義 ○鈴木 款・杉村行勇（気象研）
(16:30~17:00) 座長 北野 康・鈴木 款
- 総合討論

B 会場

一般講演 (9:30~10:30) 座長 河合崇欣

- 1 B 01 土壌による石灰炭溶出水の中和 ○坂田昌弘
(電力中研)
- 1 B 02 上田市東南第三紀青木層に見出された白鉄鉱
の成因的考察 ○矢澤彦清允・荒井智彦・上
野満夫・坂本真司(信州大繊維・長野経短大)
- 1 B 03 隅田川河口堆積物の粒径組成と重金属 ○張
華明・小倉紀雄(東京農工大農)
- 1 B 04 都市汚濁河川水中の Ni と Cu の存在と挙動
○福島和夫・小泉敏之・小林厚史(都立大理)
(10:30~11:15) 座長 安部喜也
- 1 B 05 都市機能と物質循環に基づいた都市システム
モデル ○秋山紀子・半谷高久(青山学院女
子短大・都立大都市研究センター)
- 1 B 06 都市の物質代謝の研究に何故価値論か 半谷
高久(都立大都市研究センター)
- 1 B 07 鉛と生態系 ○室住正世・中村精次・津谷直
樹・福田 薫・岩松 暉(室蘭工大・鹿児島
大)

(11:30~12:30) 座長 福島和夫

- 1 B 08 大気環境における水銀の挙動と収支—新潟県をモデルとして— 福崎紀夫（新潟県衛生公害研）
- 1 B 09 摩周湖湖水中の微量金属元素について ○野尻幸宏・河合崇欣・大槻 晃（国立公害研）
- 1 B 10 摩周湖湖水中の HCH の濃度について ○白石寛明・大槻 晃（国立公害研）
- 1 B 11 摩周湖底質中のベンゾ [a] ピレンの鉛直分布 ○田中 敦・相馬悠子・相馬光之・森田昌敏・河合崇欣・瀬山春彦（国立公害研）

課題講演Ⅱ [自然災害の予知・予測と地球化学]

コンビナー，座長 小坂文予・脇田 宏・
安藤直行 (13:30~15:10)

- 1 B 12 岩石の破碎によって放出されるガス成分の測

- 定 川辺岩夫 (愛媛大理)
- 1 B 13 地下水中のラドン濃度変化の特性 ○中村裕二・佐野有司・脇田 宏 (東大理)
- 1 B 14 有馬温泉から採取したガスの起源 鶴見 実 (東工大総理工)
- 1 B 15 地盤災害地域の湧水・地下水の水質 ○佐藤修・橋本哲夫・樋口 靖・白田卓弘・青木滋 (新潟大理・災害研・農)
- 1 B 16 長野県西部地震マグマ活動との関連 ○佐野有司・中村裕二・脇田 宏・野津憲治・小林洋二 (東大理・筑波大)
- (15:20~16:40)
- 1 B 17 1955年以降の桜島火山の活動と関連した化学的諸現象 ○鎌田政明・坂元隼雄・山崎俊司 (鹿児島大理)
- 1 B 18 近畿・京阪神地域における地球化学的手法による地震予知研究 西村 進・小泉尚嗣・吉岡龍馬 (京大理)
- 1 B 19 火口湖水中の硫黄化合物による噴火予知の可能性 ○高野穆一郎・綿坂邦彦 (東大教養)
- 1 B 20 桜島火山と草津白根火山における連続自記録観測による噴火の予知・予測の試み ○平林順一・小坂文子 (東工大)
- (16:40~17:00)
- 総合討論

C会場

- 一般講演 (9:30~10:30) 座長 山本修一
- 1 C 01 現世堆積物及び堆積岩中の脂肪族炭化水素 ○米谷 宏・粕 武・鈴木尉元 (地調)
- 1 C 02 琵琶湖1400m 柱状堆積物の有機地球化学Ⅱ 脂質化合物 小椋和子 (都立大理)
- 1 C 03 堆積性有機物の統成作用における増温率の影響と評価—バイオマーカー異性化の応用 鈴木徳行 (島根大理)
- 1 C 04 南極ビクトリアランドの Beacon Group 中のステランおよびトリテルパン ○松本源喜・町原 勉・船木 実・綿坂邦彦・鳥居鉄也 (東大教養・石油公団・極地研・千葉工大)
- (10:30~11:15) 座長 西村弥重
- 1 C 05 先カンブリア時代の岩石・鉱物中にあるアンモニウム 市原優子 (大阪市大理)
- 1 C 06 現代および古代動物の骨コラーゲンの H, C, N 安定同位体組成 ○南川雅男・R. E. Taylor・I. R. Kaplan (UCLA・三菱生命研・U. C. Riverside)
- 1 C 07 堆積高分子有機物と生体成分との相互関係の

解析Ⅰ—加熱条件下におけるケロージェン中のアミノ酸挙動 ○鈴木幼一・石渡良志 (都立大理)

(11:30~12:15) 座長 鈴木徳行

- 1 C 08 堆積高分子有機物と合成メラノイジンとの比較:熱分解ガスクロマトグラフィー ○山本修一・石渡良志・町原 勉 (都立大理・石油公団)
- 1 C 09 堆積高分子有機物の酸化分解Ⅲ 脂質由来成分の解析 ○森永茂生・町原 勉・石渡良志 (都立大理・石油公団)
- 1 C 10 海洋表層堆積物中の non-solvent extractable 脂質の起源と地球化学的性質 西村弥重 (愛知学院大教養)

課題講演Ⅲ [宇宙・地球における有機化合物の進化]

コンビーナー 下山 晃・石渡良志

(13:30~14:35) 座長 秋山雅彦

- 1 C 11 星間・星周塵と有機化合物 坂田 朗 (電通大)
- 1 C 12 炭素質隕石中の有機化合物とその化学進化 下山 晃 (筑波大化学)
- (14:35~15:45) 座長 田口一雄
- 1 C 13 先カンブリア時代の有機化合物 秋山雅彦 (北大理)
- 1 C 14 水圏、岩石圏における有機化合物の構造特性と変化 半田暢彦 (名大水圏研)
- (15:45~16:45) 座長 半田暢彦
- 1 C 15 生物指標化合物とそれらの石油地球化学への応用 ○田口一雄・鈴木徳行 (東北大理・島根大理)
- 1 C 16 現世堆積物中の有機化合物 石渡良志 (都立大理)
- (16:45~17:00)
- 総合討論

D会場

- 一般講演 (9:30~10:30) 座長 能田 成
- 1 D 01 南九州川内玄武岩類の Sr・Nd 同位体比および微量元素組成 ○宇都浩三・田中 剛・吉田武義・青木謙一郎 (地調・東北大理)
- 1 D 02 隠岐島後の下部地殻—上部マントル物質の Sr・Nd 同位体比 ○加々美寛雄・岩田昌寿・高橋栄一 (岡山地球内部研究センター)
- 1 D 03 第三紀西南日本外帯花崗岩類の地球化学—九州地方— ○岡本健二・木下 修・野中健二・八木伸二郎 (大阪府大総合科学)

- 1 D 04 西南日本外帯に産出する酸性火成岩類の Nd・Sr 同位体比について ○寺門靖高・清水 洋・増田彰正 (神戸大教養・東大理)
- (10:30~11:15) 座長 加々美寛雄
- 1 D 05 飛騨片麻岩類の Rb, Sr 含有量および Sr 同位体比 荒川洋二 (筑波大地球科学)
- 1 D 06 ストロンチウム同位体データからみたフィリピン海プレートの沈み込み ○野津憲治・荒牧重雄・大島 治・小林洋二 (筑波大化学・東大震研・東大教養・筑波大地球科学)
- 1 D 07 東北地方第三紀火山岩類の Sr 同位体比—日本海拡大との関連 ○倉沢 一・今田 正 (地調・山形大理)
- (11:30~12:30) 座長 野津憲治
- 1 D 08 コリア半島の鉍鉛同位体比 ○佐藤和郎・佐々木昭・馬淵久夫・平尾良光 (東大震研・地調・国立文化財研・青山学院大理工)
- 1 D 09 Hawaii および Iceland の火山噴出物の希ガス同位体比の特徴 ○兼岡一郎・高岡宣雄 (東大理・山形大理)
- 1 D 10 マントルウェッジの地球化学的発達史 ○能田 成・巽 好幸 (京産大教養・京大理)
- 1 D 11 堆積岩中の希土類元素存在度から見た先カンブリア紀前期の地殻とその酸化還元環境 ○長沢 宏・垣内正久・星野光雄・諏訪兼位 (学習院大理・名大教養・理)

課題講演Ⅳ [年代測定法における最近の進歩]

- コンビーナー 柴田 賢・兼岡一郎
- (13:30~14:30) 座長 今村峯雄
- 1 D 12 加速器質量分析による¹⁴C年代測定とその応用 ○中井信之・中村俊夫・木村雅也・大石昭二 (名大理・アイソトープ)
- 1 D 13 液体シンチレーション法による4~5万年の¹⁴C年代測定 ○富樫茂子・松本英二 (地調)
- 1 D 14 γ線計測による鉛-210年代測定 ○玉井英典・松本英二 (島根大理・地調)
- (14:30~15:40) 座長 兼岡一郎
- 1 D 15 種々の格子欠陥を用いた火山灰の ESR 年代測定 ○今井 登・下川浩一 (地調)
- 1 D 16 フィッション・トラック年代測定法の技術的問題点 玉生志郎 (地調)
- 1 D 17 若い火山岩の K-Ar 年代測定法 ○板谷徹丸・長尾敬介・本庄慶樹 (岡山理大)
- 1 D 18 岩石・鉱床の年代測定への希ガス分析法の応用 ○高岡宣雄 (山形大理)
- (15:40~17:00) 座長 田中 剛

- 1 D 19 Sm-Nd 年代学における最近の進歩 中村昇 (神戸大理)
- 1 D 20 La-Ba 法による希土鉱物の年代測定法の開発(Ⅱ) ○中井俊一・田崎真司・清水 洋・増田彰正 (東大理)
- 1 D 21 U-Pb 年代測定法における最近の進歩 柳 哮 (九大理)
- 1 D 22 ICP 質量分析計によるオスミウム同位体比の測定 ○増田彰正・平田岳史・清水 洋 (東大理)
- (総合討論)

第2日 10月18日 (金)

A会場

- 一般講演 (9:00~9:45) 座長 増沢敏行
- 2 A 01 有明海底泥間隙水中のリン、チッ素について ○飯盛喜代春・飯盛和代・川原幸子・本田伸浩 (佐賀大理工・佐賀短大)
- 2 A 02 沿岸域堆積物中の硫化物と間隙水中リンの関係について 角皆静男・和田雄高・渡辺康憲 (北大水産)
- 2 A 03 DSDP, Leg96 メキシコ湾で採取した間隙水中の砂糖、アミノ酸、DOC の地球化学 ○石塚明男・Venu Ittekkot・E. T. Degens (東大海洋研・Geol. — Paläontol. Inst. Univ. Hamburg)
- (9:45~10:30) 座長 蒲生俊敬
- 2 A 04 時間分画式セジメントラップを用いた西部北太平洋における沈降粒子の長期的観測 乗木新一郎・黒崎太郎・原田 晃・角皆静男 (北大水産)
- 2 A 05 沈降粒子中金属濃度と全粒子束との関係 ○乗木新一郎・黒崎太郎・原田 晃・角皆静男 (北大水産)
- 2 A 06 外洋域での沈降粒子中の天然放射性核種の鉛直的・時間的変動 ○原田 晃・角皆静男 (北大水産)
- (10:45~11:45) 座長 広瀬勝己
- 2 A 07 Pb-210からみた日本海での物質除去機構 ○田口和典・原田 晃・角皆静男 (北大水産)
- 2 A 08 海溝水中の²³⁰Th と²³¹Pa 山田正俊・野崎義行 (東大海洋研)
- 2 A 09 太平洋深海堆積物表面の²³⁰Th と²³¹Pa の分布 ○梁 漢燮・野崎義行・酒井 均・増田彰正 (東大海洋研・理)
- 2 A 10 噴火湾水中のウラン—底泥への移行の効果を見つける試み— 角皆静男・長尾誠也・

原田 晃 (北大水産)

B会場

一般講演 (9:00~10:15) 座長 浦部徹郎

- 2 B 01 宇久須珪石の活性と成因について ○香山 勲・水谷博子 (東海大理)
- 2 B 02 黄鉄鉱の熱分解における微量セレンの挙動 ○山本雅弘・熊野 純 (岡山大理)
- 2 B 03 堆積続成作用又は熱水条件下での炭質物によるウランの固定 ○中嶋 悟・Jean-Robert Disnar・A. Perruchot (日本原子力研究所・フランス国立科学研究院)
- 2 B 04 オクロ鉱石中のウラン同位体比の局所分析 ○菱田俊一・藤井 勲・柳田博明・増田彰正 (東大理・日本燃料技術開発・東大工)
- 2 B 05 オクロのウラン鉱石中のUと希土類元素に関する同位体的研究 ○日高 洋・菱田俊一・藤井 勲・増田彰正 (東大理・日本燃料技術開発)
- (10:15~11:15) 座長 松久幸敬
- 2 B 06 150°~300°Cの蒸気圧下における海水-石英-安山岩の相互作用 ○水上正勝・大本 洋 (函館工専・ペンシルベニア州立大)
- 2 B 07 流紋岩ガラスの冷却史とそのNa-Kイオン交換特性 ○白木亮司・飯山敏道 (東海洋研・理)
- 2 B 08 熱水条件下におけるアルカリホウケイ酸ガラス固化体の浸出挙動 ○柳沢文孝・酒井 均 (東海洋研)
- 2 B 09 非晶質アルミノケイ酸塩の相転移反応に及ぼすアルカリ及びアルカリ土類金属イオンの影響 ○二宗啓介・横山拓史・樽谷俊和 (九大理)
- (11:30~12:30) 座長 水上正勝
- 2 B 10 種々の条件下での硫酸カルシウム中へのストロンチウムの取り込み ○三好登和子・今橋正征・吉野論吉 (東邦大理)
- 2 B 11 アルカリ性溶液中におけるアルミン酸イオンとケイ酸イオンとの相互作用 ○横山拓史・木下説子・山中千穂・樽谷俊和 (九大理・福岡大理)
- 2 B 12 モノケイ酸溶液中におけるアルミニウムの挙動 ○山中千穂・横山拓史・樽谷俊和 (九大理)
- 2 B 13 ²⁹Siおよび²⁷Al-MAS/NMRによるカオリナイトの加熱にともなう構造変化の研究 ○渡部徳子・清水 洋・増田彰正・長沢敬之

助・斎藤 肇 (放送大・東大理・静岡大理・国立がんセンター)

C会場

一般講演 (9:00~9:45) 座長 米谷 宏

- 2 C 01 高等植物からの揮発性成分Ⅲ 太田啓一 (名大水圏研)
- 2 C 02 林内大気中粒子状有機物質の分析 ○横内陽子・安部喜也 (国立公害研)
- 2 C 03 単分子膜形成を通してみた海洋フミン酸のキャラクターゼーション ○早瀬光司・坪田博行 (広大総合科学)
- (9:45~10:45) 座長 小椋和子
- 2 C 04 ¹³Cをトレーサーとする植物プランクトン有機物の生産過程解析 ○濱 順子・半田暢彦 (名大水圏研)
- 2 C 05 局地的湧昇域における有機物生産の特徴-特にアミノ酸組成について- 浜 健夫 (名大水圏研)
- 2 C 06 湖底堆積物直上水中における物質代謝-室内実験を中心に 小山忠四郎 (愛知学院大教養)
- 2 C 07 都市水域におけるアルキルベンゼンⅦ-東京湾表層堆積物中の分布- ○高田秀重・石渡良志 (都立大理)
- (11:00~12:00) 座長 太田啓一
- 2 C 08 東京湾への多環芳香族炭化水素の河川による移動について ○斎藤裕政・高田秀重・尹順子・石渡良志 (都立大理)
- 2 C 09 東京湾堆積物中の多環芳香族炭化水素の分布Ⅱ-分布と存在量- ○尹 順子・石渡良志・松本英二 (都立大理・地調)
- 2 C 10 表層堆積物の粒径分布と多環芳香族炭化水素 ○佐藤茂之・半田暢彦・松永捷司 (名大水圏研)
- 2 C 11 東京湾河口域堆積物中のリグニン成分およびセルロースの分布 ○久武潤子・鶴崎 実・石渡良志 (都立大理)

D会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 長尾敬介

- 2 D 01 セリウム同位体比の測定とその年代学的应用 ○牧嶋昭夫・中井俊一・清水 洋・増田彰正 (東大理)
- 2 D 02 グリーンランド Amitsoq 片麻岩についてのネオジム同位体比と希土類元素存在度 ○清水 洋・田崎真司・中井俊一・牧嶋昭夫・増田彰正 (東大理)

- 2 D 03 ジルコンの色による後期新生代火山岩の年代推定 甲斐邦男 (石油資源開発技研)
- 2 D 04 南部フォッサマグナ西部地域における断層のESR年代測定 福地龍郎 (筑波大地球科学)
- (10:00~10:45) 座長 玉生志郎
- 2 D 05 ダイヤモンドのK-Arアイソクロン年代測定 ○座主繁男・小嶋 稔・仁藤 修 (東大理・東京農工大)
- 2 D 06 取消し
- 2 D 07 北海道~東北地方周辺における岩石の⁴⁰Ar-³⁹Ar年代 滝上 豊 (東大宇宙線研)
- 2 D 08 フィッション・トラック年代測定における中性子フルエンスの絶対測定とzeta値決定の検討 ○本多照幸・雁沢好博・野崎徹也 (武蔵工大原研・北海道教育大)
- (11:00~12:15) 座長 平尾良光
- 2 D 09 地質調査所岩石標準試料 JF-1, JA-2, JG-2とその化学組成 ○藤貫 正・原山智・氏家 治・須藤定久・安藤 厚 (地調)
- 2 D 10 SIMSによるケイ酸塩ガラスの定量分析 ○坂本尚義・末野重穂 (筑波大地球科学)
- 2 D 11 質量分析によるGa, In, Tl, Tiの定量 ○齋藤 努・清水 洋・増田彰正 (東大理)
- 2 D 12 アルカリ溶液中でスチルバソとゼフィラミンを用いる標準岩石中のアルミニウムの吸光度定量 ○大森禎子・吉池雄蔵・岡村 忍・鈴木 仁 (東那大理)
- 2 D 13 α 線スペクトロメトリによる岩石標準試料中のウラン同位体比の測定 ○金井 豊・安藤厚 (地調)

特別シンポジウム：現代基礎化学と地球化学の接点
コンビナー 杉村行勇・松久幸敬

A会場 (13:15~15:45)

- 1 a 溶液化学の諸問題 大滝仁志 (東工大総合理工)
- 1 b 溶液化学からみた海水の諸現象 廣瀬勝己 (気象研)
- 2 a 鉄-水反応と地球核形成過程 深井 有 (中央大理工)
- 2 b 実在および架空のケイ酸塩の高圧下の結晶構造 松井義人 (岡山大地球内部研究センター)
- 3 a 化学進化の諸問題 原田 馨 (筑波大化学)
- 3 b 生物指標性有機物について 半田暢彦 (名大水圏研)

総会 A会場 (16:00~17:00)

第3日 10月19日 (土)

A会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 乗木新一郎

- 3 A 01 マンガン酸化物-海水間の微量元素の分配 ○竹松 伸・佐藤義夫・岡部史郎 (理研・東海大海洋)
- 3 A 02 微量元素からみたマンガン・ノジュールの地域的特徴 ○豊田和弘・中村裕二・脇田 宏 (東大理)
- 3 A 03 陸性マンガン団塊中の希土類元素について ○兼島千香子・平良初男・兼島 清 (琉球大理)
- 3 A 04 日本海深海堆積物中の高二酸化マンガン層 ○増沢敏行・小山睦夫 (名大水圏研・京大原子炉)
- (10:00~11:00) 座長 竹松 伸
- 3 A 05 微量金属のシリカゲルへの吸着におよぼす他イオンの影響 ○大崎 進・杉原真司・黒木康弘・高島良正 (九大RI・理)
- 3 A 06 マリアナ海域における柱状堆積物の化学成分について 豊田恵聖・○東城義博・岡部史郎 (東海大海洋)
- 3 A 07 現世堆積物中のスズ存在量と堆積環境 ○寺島 滋・井内美郎・米谷 宏・中尾征三・三田直樹 (地調)
- 3 A 08 琵琶湖堆積物表層の放射性核種の分布 ○木村雅也・中井信之・中村俊夫・小島貞男 (名大理・アイソトープ)
- (11:15~12:15) 座長 川辺岩夫
- 3 A 09 硫黄含量から見た堆積環境-小貝川低地の泥質岩- ○粕 武・黒田和夫 (地調)
- 3 A 10 完新世における海面変化-方法とその意義 松本英二 (地調)
- 3 A 11 完新世の堆積速度、海水準変動及び気候変動に関する研究 ○大石昭二・中井信之・中村俊夫 (名大理・アイソトープ)
- 3 A 12 フランススカン帯チャートと四万十帯チャートの化学組成の比較 ○松本 良・葉袋佳孝・渡部芳夫・富永 健 (東大理)
- (14:00~15:00) 座長 金森 悟
- 3 A 13 Calciteへのマグネシウムイオンの共沈挙動-海洋産貝殻中におけるマグネシウムの分布 ○奥村 稔・橋谷 博・藤永 薫 (島根大理)
- 3 A 14 炭酸カルシウムの結晶形を規定するMg²⁺イオンについて 幸地英之・○渡久山章 (琉球

- 大理)
- 3 A 15 炭酸塩堆積物中の Mg の存在状態 大森 保
(琉球大理)
- 3 A 16 喜界島産第四紀炭酸塩岩のフッ素含量
○相沢省一・赤岩英夫(群馬大工)
(15:15~16:00) 座長 奥村 稔
- 3 A 17 炭酸カルシウムの中における多形転移機構
○荻野 健・鈴木俊雄・澤田 清(新潟大理)
- 3 A 18 いくつかの石灰岩中の希土元素パターンの特徴(Ⅱ) ○上岡 晃・増田彰正(地調・東大理)
- 3 A 19 水の関与する系における物質中の希土類元素
(特に Ho について)○川上 紀・吉田邦夫・増田彰正(東大理)

B会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 田中 茂

- 3 B 01 空気試料中の二酸化炭素の精密分析 ○金森
悟・金森暢子(名大水圏研)
- 3 B 02 北海道・女満別における大気中一酸化二窒素
(N_2O) の測定 ○広田道夫・村松久史・
室松富二男・橋本雅彦・小池捷春(気象研・
地磁気観測所女満別出張所)
- 3 B 03 大気中の揮発性微量必須元素に関する研究
○森田道隆・平木敬三・宮浦紀史・重松恒信
(近畿大理工)
- 3 B 04 大気粉じん中のアルキルヒ素化合物について
○向井人史・安部喜也(国立公害研)
(10:00~11:00) 座長 広田道夫
- 3 B 05 黄砂現象による大気中のエアロゾル化学組成
の研究(Ⅱ) ○田島将典・田中 茂・橋本
芳一(慶大理工)
- 3 B 06 酸素同位体比をトレーサーとしてみた東アジ
アの土壌中の風成成分 ○松久幸敬・溝田智
俊(地調・九大農)
- 3 B 07 北西季節風下の奥尻島における日平均大気中
土壌成分濃度の6ヶ月間連続観測 ○鈴木利
孝・角皆静男(北大水産)
- 3 B 08 森林による大気浮遊粒子の捕集 ○吉田
聡・一國雅己(東工大総合理工)
(11:15~12:30) 座長 土器屋由起子
- 3 B 09 北太平洋域における大気中 ^{210}Pb の降下速度
角皆静男・○横田喜一郎・倉田隆喜(北大水
産)
- 3 B 10 ^{90}Sr と ^3H の成層圏降下について ○金沢照
子・三宅泰雄・猿橋勝子(気象研・地球化学
研究協会)

- 3 B 11 浦和地域における降水中の Na^+ イオンと
 Cl^- イオンの起源 ○君島克憲・小沢竹二郎
(埼玉大工)
- 3 B 12 雨水中の亜硫酸の酸化速度について(第2報)
○山中一夫・田中 茂・橋本芳一(慶大理工)
- 3 B 13 降水中粒子成分と大気浮遊粒子中の元素濃度
○安部喜也・西川雅高(国立公害研)
(14:00~15:00) 座長 金森暢子
- 3 B 14 南極昭和基地周辺の積雪中の微量元素濃度
○西川雅高・安部喜也・忠鉢 繁(国立公害
研・気象研)
- 3 B 15 南極ドライバレー上部ライト谷湖沼群の水質
調査 中谷 周・○森本隆夫・鳥居鉄也(弘
前大理・日本分析センター・千葉工大)
- 3 B 16 南極氷床みずほ高原における酸素同位体垂直
分布 加藤喜久雄(名大水圏研)
- 3 B 17 水系の新しい解析方法 綿拔邦彦(東大教養)
(15:15~16:00) 座長 綿拔邦彦
- 3 B 18 裏磐梯五色沼湖沼群の水質 ○河合崇欣・和
田秀徳・坂本 充(国立公害研・東大・名大)
- 3 B 19 限外濾過法による河川水中の微量元素のキャ
ラクタリゼーション ○谷崎良之・山崎正
夫・下川利成・永塚澄子(都立アイソトープ
総合研)
- 3 B 20 液体クロマトグラフ法による天然水中の微量
重金属の分離定量 松本哲一・○金森暢子・
金森 悟(名大水圏研)
(16:00~17:00) 座長 加藤喜久雄
- 3 B 21 化学組成および同位体組成からみた三島市周
辺の地下水流動の推定 ○吉岡龍馬・北岡豪
一・小泉尚嗣・土 隆一・益田晴恵・酒井
均(京大防災研・京大理・静岡大理・大阪市
大理・東大海洋研)
- 3 B 22 ラドン含量の変化と水質形成について
○堀内公子・石井 忠・村上悠紀雄(都立大
理・山梨医大 RI 研・北里大衛生)
- 3 B 23 嫌氣的底泥におけるリン酸塩沈殿生成の化学
的形態について ○坂田康一・河合崇欣・
大槻 晃(北海道公害研・国立公害研)
- 3 B 24 小貝川低地帯における堆積物中の間隙水の水
質 ○池田喜代治・遠藤秀典・磯部一洋・
永井 茂(地調)

C会場

一般講演 (9:00~10:00) 座長 佐竹 洋

- 3 C 01 北部木曽地域の、石墨を含む変成泥質岩の、
水素・炭素同位体比 ○森清寿郎・黒田吉益

- (信州大理)
- 3 C 02 飛騨宇奈月帯の石墨の同位体比について
伊藤良三(静岡大理)
- 3 C 03 静岡県清越鉱山地域の方解石の炭素・酸素同
位体組成 鹿園直建(東大理)
- 3 C 04 ハワイ・ロイヒ海底火山産アルカリ岩の S
含量と $^{34}\text{S}/^{32}\text{S}$ ○酒井 均・上田 晃・J. G.
Moore(東大海洋研・カルガリー大・合衆国
地調)
(10:00~11:00) 座長 垣内正久
- 3 C 05 熱変成堆積岩中の炭素物質の水素同位体比
○能登征美・吉田尚弘・水谷義彦・富田俊弘
(岡山地球内部研究センター・富山大理・
日本碍子)
- 3 C 06 熱分解法による鉱物中のアンモニウム態窒素
の抽出と同位体比測定 ○原山 聡・松尾禎
士(東工大理)
- 3 C 07 新潟、秋田県地域における天然ガス中の希ガ
ス同位体組成 ○高橋 誠・坂田 将・高岡
宣雄(地調・山形大理)
- 3 C 08 イースター島黒曜石中のネオンの濃縮
○長尾敬介・松田准一・安川克己(岡山理
大・神戸大理)
- (11:15~12:30) 座長 千葉 仁
- 3 C 09 微量の水の同位体比分析 ○大場 武・
風早康平(東工大理)
- 3 C 10 塩類水溶液における水和圏内外の水の水素同
位体分別 ○垣内正久・阿部健一郎・鎌田久
子(学習院大理)
- 3 C 11 高温における水蒸気と塩類水溶液間の D/H
と $^{18}\text{O}/^{16}\text{O}$ の分別 ○風早康平・松尾禎士(東
工大理)
- 3 C 12 結晶と水溶液系における水素および酸素同位
体の分別○トリネトラ プラダナンガ・松尾
禎士(東工大理)
- 3 C 13 含水鉱物-水間の重水素分配係数 堤 眞
(東大海洋研)
(14:00~15:00) 座長 寺島美南子
- 3 C 14 都市河川における有機物収支 ○亀元宏宣・
小倉紀雄(東京農工大農)
- 3 C 15 豊川中流部における懸濁態有機物の変動 ○
佐野方昂・神谷正俊(愛知県公害調査セン
ター)
- 3 C 16 南浅川におけるアミノ酸 ○河野はるみ・
小倉紀雄(東京農工大農)
- 3 C 17 日本のバックグランド海域沿岸の Mussel
Watch II 有機塩素系農薬及び PCB ○尾崎邦

- 雄・酒井 洋・森田昌敏(新潟県衛生公害
研・国立公害研)
(15:15~16:15) 座長 佐野方昂
- 3 C 18 琵琶湖産貝類中の微量必須元素定量に関する
研究 ○中口 譲・平木敬三・青野辰雄(近
畿大理工)
- 3 C 19 アワビ食物連鎖における鉛の挙動 松本哲
一・平尾良光・木村 幹・山川 紘・前田
勝・森田良美・飯田忠三・小島 功・内田哲
男(名大水圏研・青学大理工・東京水産大・
名工大)
- 3 C 20 水生蘚苔類によるスカンジウムの蓄積 佐竹
研一(国立公害研)
- 3 C 21 多摩川における水生生物中の微量元素
○山崎正夫・谷崎良之・下川利成・永塚澄子
(都立アイソトープ総合研)
- ## D会場
- ### 一般講演 (9:00~10:00) 座長 海老原充
- 3 D 01 深海堆積物中の高 $^3\text{He}/^4\text{He}$ 比の担体について
○福本浩敏・松田准一・長尾敬介・上嶋正人
(神戸大理・岡山理大・地調)
- 3 D 02 深海堆積物中のシリカの表面積測定 ○松田
准一・福永一哉・新居 豊・伊東敬祐(神戸
大理)
- 3 D 03 深海底堆積物中の地球外起源物質(Ⅱ)○甘
利幸子・小嶋 稔(神戸自然科学・東大理)
- 3 D 04 深海底堆積物中の希ガス 高柳昌弘(東大理)
(10:00~11:15) 座長 松田准一
- 3 D 05 C-T 境界試料の鉱物学的研究 ○三浦保
範・大 倉 康 夫・J. C. Rucklidge・M.
Fornaseri・T. F. D. Nielsen(山口大理・情
報数理研・トロント大・ローマ大・グリーン
ランド地調)
- 3 D 06 石質隕石中の宇宙線生成物 本田雅健(日大
文理)
- 3 D 07 南極産 LL コンドライトにみられる衝突事件
について ○岡野 修・中村 昇(神戸大理)
- 3 D 08 月隕石と考えられる Yamato-791197
○高橋和也・増田彰正・清水 洋(東大理)
- 3 D 09 南極ヤマトポリミクトユークライト隕石中
clast の化学組成(Ⅱ) ○福岡孝昭・上山
治貴(学習院大理)
(11:30~12:30) 座長 福岡孝昭
- 3 D 10 非平衡オーディナリ・コンドライト中の希土
類元素の分布 海老原 充(群大教養)
- 3 D 11 隕鉄中の希土類元素定量の試み ○米田成

一・増田彰正（東大理）

3 D 12 Allende 隕石中のコンドリュールにみられる希土類元素の分別 ○三澤啓司・中村 昇（神戸大自然科学・理）

3 D 13 REE 存在度パターンからみた個々のコンドリュールの変成度について ○中山朋子・中村 昇（神戸大理）

（14：00～15：00） 座長 北 逸郎

3 D 14 ガスクロマトグラフによる火山ガスの現場分析 ○渡辺博之・松尾禎士（東工大理）

3 D 15 草津白根火山1982年噴火以後の温泉水・河川水の成分変化（その2） 垣花秀武・小坂丈予・小坂知子・○武蔵正明・平林順一（上智大理工・東工大工）

3 D 16 草津白根火山活動と火口湖湖水・固形噴出物の成分変化 ○小坂丈予・垣花秀武・小坂知子・平林順一・福井恭子（上智大理工・東工大工）

3 D 17 草津白根山地域温泉のホウ素同位体組成比と日本列島弧との関連 ○垣花秀武・小坂知子・小坂丈予・渋谷義紀・野村雅夫（上智大理工・東工大原子炉研）

（15：15～16：15） 座長 野田徹郎

3 D 18 東北日本の地熱ガス中の水素のD/H比 清棲保弘（名大理）

3 D 19 島原、北軽井沢温泉のマンガン沈澱物 ○鈴木勲子・酒井幸子（東北大教養・群馬県衛生公害研）

3 D 20 蓼科高原の酸性塩化物泉 佐藤幸二（中央温泉研）

3 D 21 九重硫黄山火山における火山ガスと地下水の混合 ○水谷義彦・林 真司・杉浦 孜（富山大理・愛教大）

（16：15～17：00） 座長 清棲保弘

3 D 22 本邦初の3,000m 坑井から得られた地熱水の化学的性質 ○野田徹郎・茂野 博・阿部喜久男（地調）

3 D 23 霧島地熱地域の土壌ガス組成と深部熱水の空間分布 ○北 逸郎・田口幸洋（秋田大鉱山・九大生産研）

3 D 24 火山列島硫黄島の熱水 ○吉田則夫・垣内正久・田染典子・熊谷貞治（国立防災センター・学習院大理・東工大理）

P 会場

ポスターセッション（会期中掲示，討論時間は19日 13：00～14：00）

P 01 黒潮とその周辺における大気及び表面海水中の二酸化炭素分圧 ○井上久幸・伏見克彦・杉村行勇（気象研・気象庁）

P 02 西部北太平洋における大気及び表面海水中の二酸化炭素分圧と炭素安定同位体比 ○井上久幸・杉村行勇（気象研）

P 03 筑波における大気降水中のプルトニウムについて ○廣瀬勝己・杉村行勇（気象研）

P 04 日本における⁹⁰Sr、¹³⁷Cs および³H の降下量 ○青山道夫・井上久幸・葛城幸雄（気象研）

P 05 日本の主要河川水中の⁹⁰Sr、¹³⁷Cs および²³⁹、²⁴⁰Pu の含量 ○青山道夫・廣瀬勝己・葛城幸雄・林村行勇（気象研）

P 06 日本の主要河川水中のHTOと $\delta^{18}\text{O}$ について ○井上久幸・葛城幸雄・杉村行勇（気象研）

P 07 日本海溝および伊豆・小笠原海溝深層水の化学的性質 酒井 均・野崎義行・○蒲生俊敬・坪田博行・金森 悟（東大海洋研・広大総合科学・名大水圏研）

P 08 隠岐島における大気粉じん構成成分の年変動 ○向井人史・安部喜也・竹下和男（国立公害研・島根県西郷保健所）

P 09 地熱水の化学種組成の推定と温度計としての応用 千葉 仁（岡山地球内部研究センター）

P 10 炭酸塩岩に含まれるアミノ酸と単糖類 寺島美南子（地調）

P 11 ²⁹Si および²⁷Al-MAS/NMR によるアロフェンおよびイモゴライトの構造に関する研究 清水 洋・渡部徳子・増田彰正・逸見彰男・斉藤 肇（東大理・放送大・愛媛大農・国立ガンセ研）

P 12 X線光電子分光法による岩石粉末の表面組成分析 ○相馬光之・瀬山春彦（国立公害研）

P 13 地質調査所岩石標準試料の化学組成1985 ○安藤 厚・寺島 滋（地調）

P 14 黒曜石の微量成分元素存在量—黒曜石器産地推定の基礎として— 二宮修治・○網千守・大沢真澄（東京学芸大教育）

P 15 ⁵⁷Fe メスバウアー分光法による海洋底盤岩の変質の研究 ○薬袋佳孝・富永 健（東大理）

P 16 小笠原海域ドレッジ試料の地球化学的研究（1） ○薬袋佳孝・石井輝秋・石橋純一郎・富永 健（東大理・海洋研）

P 17 Ba をトレーサーとしてみたメキシコ湾大陸

棚における堆積物の移動 ○加藤義久・P. N. Bootho・B. J. Presley（東海大海洋・テキサスA&M大）

P 18 日本とニュージーランドの温・鉱ガス中の希ガス同位体組成 ○長尾敬介・板谷徹丸・樋口さとみ・岡田利典・林 孝充（岡山理大）

P 19 南極隕石の希ガス同位体組成 ○長尾敬介・松田准一（岡山理大・神戸大理）

P 20 石墨結晶内の炭素同位体比の不均質 和田秀樹（静岡大理）

P 21 月面試料及びコンドライト隕石中のK含有相について 三浦保範（山口大理）

P 22 クラスター分析におけるアルゴリズムの改良 伊藤司郎（地調）

講演要旨集 予約価（9月14日まで）3,000円，当日価（9月15日以降）3,500円。いずれも年会に出席されない方への送付も致します。

申込み先 〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
工業技術院地質調査所技術部
1985年度日本地球化学会年会準備委員会
東野徳夫

◎特許法第30条第1項の規定に基づく学術団体の指定について

会員からの要望により標記申請を行ってまいりました昭和60年3月27日（60特総第353号）に学術団体の指定を受けました。指定規約の内会員に直接関係のある1. をそのまま掲載いたします。

1. 貴学会が開設した学術講演会，講習会，シンポジウム等の研究集会において，原稿，図面等の文書（以下「文書等」という。）をもって発表された発明又は考案について当該発表者又はその承継人（当該発明又は考案に係る特許又は実用新案登録を受ける権利を承継した者）から特許法第30条第1項（実用新案法第9条第1項において準用する場合を含む。）の規定の適用を受けるための証明書を求められたときは，速やかに，事実に基づいて証明書を発行しなければならない。

地質年代データベース作成についてのおねがい

地質調査所では，昭和60年度から「地質データベースの開発と利用に関するパイロット研究」（工業技術院特別研究：代表者 山田直利）を開始しました。初

年度は，地質図データベース，地質標本データベースおよび地質年代データベースの構築に重点を置いており，目下，放射年代に関する公表資料の収集・整備を始めています。このプロジェクトによりバンキングされた年代データは，種々の検索目的のために用いられる一方，近い将来，年代図及びその附属資料として印刷される予定です。ついては，K-Ar年代およびRb-Sr年代に関する論文別刷の残部をお持ちの方がありましたら，当所宛1部御送り頂けると幸いです。とくに，学・協会誌以外の出版物に掲載されたものは，当方で見落す可能性がありますので，是非御送り下さい（コピーでも結構です）。また，今後作業の過程で，試料採取地点などについて問い合わせをすることがあると思いますので，この点についても御協力のほどおねがいします。

資料送付先：〒305 茨城県筑波郡谷田部町
東1-1-3
地質調査所技術部地球化学課
中嶋 隆（Tel. 0298-54-3556）または
宇都浩三（Tel. 0298-54-3558）

日本学術会議第四部

地球化学・宇宙化学研究連絡委員会より

この委員会は昨年（1984年）1月24日第12期第6回及び本年1月24日第7回の会合を行ったほか，拡大幹事会として昨年内に2回（4月及び7月）に在京委員を中心に会合を開いて来た。

この間学術会議の改組の問題があり，きわめて流動的な時期をむかえたため，かえってニュースに報告を行う機会を失ってしまった次第である。一応一段落し第13期をむかえるに至った時点で，本委員会の動向について簡単に要点を箇条書きにして記載してみることとした。

1. 昨年3月には研究連絡委員会への昇格申請を要望書の形で第四部長宛に提出した。従来は“研究連絡会”の格付けで“地質学研究連絡委員会”の下部組織として位置していたのであるが，之を独立の研究連絡委員会に昇格させる要望を表明したものである。これは昨年11月に実現し，12名の旧委員構成のまま再発足した。

2. 昨年4月及び7月の幹事会において，学術会議内における，地球化学，宇宙化学の位置づけとしては，“地球科学”の一分野として扱われるよう要望することにした。すなわち会員選出に関連し，化学研連から

ではなく、後日決定したように“地球科学総合研連”のなかで処理されるよう要望することとした。ただし地球科学総合研連の性格については、地学関係5研連合同とし、会員の3名の枠をこのなかで審議決定するよう要望したのであるが、之は実現されなかった。従来の地質研連、鉱物研連より各1名が独自に選出されることとなり、総合研連としては残りの1名の枠を持ち、地球化学、古生物学、第四紀のほか地質、鉱物等の加わった各学協会の推せん人の会合の場において選出する方式になった。

3. 第27回万国地質学会議 (IGC) が昨年8月モスクワにおいて開催された。本研連からは本田委員長が学会議からの代表の一人として派遣され、同時に開催されたIAGC総会に出席した。

4. IAGC総会においては、次期(1984-1989)役員として、会長にGrünenfelder (スイス)、副会長にWanke (西独) 両氏が選出された。8名の評議員のうち日本からは、木越邦彦氏が選ばれた。尚任期は次回IGCが米国で1989年に開催予定なので之に合せて1年長くなっている。

5. 第29回IGCを1992年に日本で開催する問題については、中国からの開催提案とかち合ったのでIUGS総会では開催国の審議は行われなかった。(その後のIUGS評議員会では日本開催の方向に固まった模様である)。

6. 1985年度海外研究会派遣候補者として、武田弘及松尾禎士両委員を推薦した。(その後武田氏に対し、西独Mainzで開かれる南極隕石シンポジウム(IAGC主催)に出席が認められた)。

7. 研連内小委員会として「隕石科学」及び「年代問題」の2つがあるが、両者共次期以降も存続を希望することとした。(学会議改組に伴い之等小委員会は一般に認められない情勢にある)。

8. 第13期本研連委員の選出母体(分野)について再検討することとし討議を行った。学会議自体が学会を中心として改組されている以上選出母体を学会中心とすることが望まれる。しかし「宇宙空間研連」及び「地球物理学研連」より各1名選出されて来ている現状は容易に変更し難いとの認識を確認した。地学関係、化学関係を含めてこの問題は次回に最終決定を行うこととした。1985年5月21日に第12期第8回委員会を開催した。第12期の最終の会合であるので第13期への申し送り事項及び委員選出法について討議した。

申し送り事項としては前項のような小委員会等のほか、今期に行われた会員選出にあたり、学界の古い体質がむき出しになってしまい学際領域に対する配慮を欠いていた点を再考してほしい旨要望することとし

た。

(この件に関しては後日第1回部長宛要望書の形で提出した)。

本研連委員の選出について

地球物理学研連に2名(fluidとsolidの2分野)推せん依頼することとし、日本地球化学会よりは3名推せんすることとした。他は従来通りとする。

(本田雅健)

1986年度「女性科学者に明るい未来をの会・猿橋賞」

猿橋賞の受賞候補者推薦の依頼がありました。本賞は自然科学の分野で顕著な業績をおさめた女性科学者(推薦メ切りで50才未満)に贈呈されます。

推薦のメ切りは、1985年11月末日(到着)です。詳細は、女性科学者に明るい未来をの会(〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217、電話03-330-2455)へおたずね下さい。

1984年度第3回日本地球化学会 評議員会議事録

日時: 1984年10月17日18時~21時

場所: 名古屋市 王山会館

出席者: 松尾禎士会長、増田彰正副会長、安部喜也、
一国雅巳、小椋和子、小倉紀雄、金森 悟、兼島 清、
川辺岩夫、北野 康、清水 洋、鈴木 款、田口一雄、
田中 剛、角皆静男、中井信之、中村 昇、能田 成、
野津憲治、半田暢彦、松久幸敬、脇田 宏 各評議員
大隅多加志幹事

I. 前回議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 庶務(小椋評議員)

*9月8日の幹事会でG.J.別刷代金改訂について討議した。次回幹事会で成案をえて次回評議員会に提案する予定である。

*日本陸学会より「第13期日本学術会議会員選出に関する会長声明」が届いている。(回覧)

*9月29日に日本学術会議推薦管理会あて第13期会員の推薦のための学術研究団体の登録を申請した。

*東京大学海洋研究所共同利用の案内・とうきゅう環境浄化財団公募・秩父宮記念学術賞候補推薦依頼がきている。適宜ニュースに掲載したい。

*PAC CHEM 84に本会が関係団体として加わっていないことについて抗議文を出すこととした。

*幹事会で検討し、会長名で9月13日現在会費2年以上滞納者に督促状を発送した。なお住所不明の会員については、評議員の協力をえて連絡を取りたい。また会長の判断で坪井誠太郎会員について会誌寄贈のあつかいとした。

2. 編集

(一国評議員) G.J.は、Vol. 18, No. 3 発送済。No. 4 完成, No. 5, 6 印刷中。Vol. 18を年内に刊行にこぎつけることが出来る予定。

(小倉評議員)「地球化学」18巻1号9月末発行、5編43ページ。2号は編集集中、1編受理。年会のシンポジウム、課題討論から特集をくみたい。

(田中評議員)年会プログラムを掲載し、会員アンケートをとじこんだニュース102号を9月に発行した。103号は、原稿締め切り来年1月10日、2月はじめ発行予定。

III. 議事

1. 入退会(小椋評議員)

*入会者11名: 佐野有司、溝田智俊、荒井康司、赤工浩平、樋口敬二、松村 徹、君島克憲、尹 順子、黒崎太郎、平井昭司、卜部明子

*退会1名: 小林重喜

*除籍13名: 梁根 達、五十嵐龍志、小泉正明、大友幸一、岸本文男、佐川直史、下島 光、田中省三、竹田 篤、千野光芳、浜野洋三、前川徳昭、望月常一

以上を承認。会員現況は、

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1984年4月30日	866	12	2	880
入会	11	0	0	11
退会	1	0	0	1
除籍	13	0	0	13
1984年8月31日	863	12	2	877

2. 1984年度日本地球化学会総会について

*小椋評議員より、次第の説明があり了承した。

3. 1983年度事業および決算報告について

*小椋評議員・野津評議員から説明があり、了承した。

4. 1984年度事業および会計中間報告について

*小椋評議員・野津評議員から説明があり、了承した。

5. 1985年度事業計画および予算案について

*小椋評議員より、事業計画の説明があり、これを了承した。

*野津評議員の予算原案が示され、鳥居監事の意見が

紹介された。意見交換ののち、新たに野津評議員から提案された修正案を了承した。

6. 財政小委員会設置について(松尾会長)

*会計幹事の野津評議員より本会財政状況につき説明ののち、評議員会内に委員長: 増田, 委員: 野津・鳥居・小椋・清水, で財政小委員会を設置することを会長より提案、それを承認。次回評議員会に検討結果を提出してもらうこととした。

7. 日本学術会議会員候補者の選定について(松尾会長)

*松尾会長より前回評議員会以降の対応につき説明ののち、意見を交換。これまでの評議員会・幹事会レベルでの対応が本会としても総会レベルでオーソライズされる必要があろうとの意見が大勢をしめ、半田評議員から、「日本地球化学会の選定する日本学術会議会員候補者および推薦人の決定手続きについては、評議員会に一任していただきたい旨、総会に提案する」との提案があり、これについて採決。22名の全員賛成で可決。

*総会での本件の承認をまって、次回評議員会で検討することとした。

8. 日本学術会議鉱物学研究連絡委員会鉱床学専門委員会の本会推薦委員について(松尾会長)

*鉱物学研連委員長よりの推薦依頼が来ているので、委員を松久幸敬氏にお願いしたいと提案、これを了承した。

9. 名誉会員推薦について(松尾会長・中井評議員)

*松尾会長から、現在3名の方のお名前があがっていること、うち小穴進也会員については、幹事会で審議した分であることを説明。さきに小穴進也会員について審議することとし、提案者中井評議員から、小穴進也会員の名誉会員推薦理由が説明された。会則・前例等による名誉会員推薦の基準、手続きなどが討論され、本評議員会では無記名投票により過半数の賛成をもって総会に提案することと決した。引き続き無記名投票の結果、22名の全員賛成で総会に小穴進也会員の名誉会員推薦の評議委員会提案をすることとなった。

*ここで「名誉会員推薦については、評議員会に提案される前に幹事会で審議願いたい」旨の動議が取り上げられ、挙手による採決の結果20名の賛成多数で、これを可決。したがって小穴進也会員を除く2名については、次回幹事会で検討することとなった。

10. 1985年度開催地について(松久評議員)

*筑波研究学園都市で引き受けてもらえることになった。会場は、工業技術院共用講堂、事務局は地質調査所。年会委員長は東野徳夫氏、事務局長は、柴田賢氏。1985年10月17-19日を予定。以上を承認した。

1985年度第1回日本地球化学会
評議員会議事録

日時：1985年2月2日 17時～20時40分

場所：赤門学士会館

出席者：松尾禎士会長、増田彰正副会長、安部喜也、
一國雅巳、小椋和子、小倉紀雄、金森 悟、兼島 清、
北野 康、佐藤和郎、椎川 誠、清水 洋、鈴木 款、
田中 剛、角皆静男、東野徳夫、中村 昇、野崎義行、
野津憲治、半田暢彦、松久幸敬、脇田 宏 各評議員
大隅多加志 幹事

I. 会議にさきだち以下のことを承認した。

1. 本年度年会実行委員長である東野徳夫氏に役員選出細則6-3により、評議員を委嘱する件を承認した。
2. 前回の議事録を承認した。

II. 報告事項

1. 庶務（小椋評議員）

*PAC CHEM 84に本会が関係団体として加わっていないことについて日本化学会あて抗議文を出した。
*会誌を筑波科学万博に出品することとした。

2. 会計（野津評議員）

1984年度収支決算（まだ監査をうけていないもの）を資料により説明。単年度では約100万円の赤字を生じている。また最近5年間の収支一覧でわかるように、今後収支好転の見込みはない。

1985年に予想される財政赤字の対策としての旅費支給削減策に協力をお願いしたい。

3. 編集・ニュース

（一國評議員）G. J. Vol. 18は、総ページ数320で、84年のうちに印刷を完了。現在のところ、投稿受付状況は安定、16編手持ち、審査中6編、著者へ差し戻し中12編。19巻1号は、2月末刊行予定。

（小倉評議員）「地球化学」18巻2号は、1月28日印刷に回した。2月末～3月刊行予定。内容は、一般原著論文2編、特集として年会シンポジウム「河口域の地球化学」から4編。

（田中評議員）ニュース103号を2月半ばに送付予定。内容は将来計画委員会アンケート結果、年会での将来計画委員会談話会についての記事等。16ページ。

4. 行事（松久評議員）

1985年2月例会を2月2日午後実施した。テーマが「地球化学図」、講師には椎川誠氏・伊藤司郎氏。出席者数32名（うち会員26・非会員5・不明1）。6月例会については未定。

5. 日本学術会議関係（松尾会長）

*1月24日の地球化学・宇宙化学研究連絡会に出席。IAGC 評議員に日本からは、学習院大・木越教授が決まった。第13期の研連委員の推薦依頼が本会あてにある予定。

6. その他（松尾会長）

*本会と文誌編集委員をおねがいでいた小沼直樹氏が1月15日逝去された。本会からは弔電と花輪をおくり、また松尾が弔辞を読んだ。評議員会としても謹んで故人の冥福を祈りたい。

III. 議事

1. 入退会（小椋評議員）

*入会9名：笠井加一郎、中村俊夫、永田 武、田村和巳、川幡穂高、加藤尚之、白石直典、野村雅夫、山本鋼志

*退会8名：桂 敬、鈴木良貴、林 保、西田貴志子、飯田忠三、水谷達夫、大西富雄、C. A. Ponnamperma

以上を承認。会員現況は以下のとおり。

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1984年8月31日	863	12	2	877
入会	9	0	0	9
退会	8	0	0	8
変更		-1	+1	
1984年12月31日	863	12	3	878

2. 日本学術会議会員候補者の選定について（松尾会長）

*本会の規模では会員候補者1名、推薦人2名を届出できるため、この場でもう1名の推薦人および会員候補者1名を選ぶことを提案。

*総会において評議員会に一任された「候補者・推薦人の選定手続き」としては、この方法は今回限りのものであることを確認ののち、まず会員候補者について推薦を受付。名前のあがった北野 康・増田彰正の両氏について無記名投票の結果、増田13票・北野8票・白票1票で増田彰正氏を会員候補者に選定した。

*引き続き、松尾禎士氏（すでに前々回の評議員会で推薦人として選出済み）に加えてもう1人の推薦について選出。推薦を受付、名前のあがった北野 康・柴田 賢の両氏について無記名投票の結果、北野13票・柴田9票で北野 康氏を推薦人に選出。

3. 選挙管理委員会設置について（松尾会長）

*役員選出細則の規定により現評議員のうちで次期評議員としての被選挙権をもたないかたの中から小椋・田中・野津の3氏にお願いすることとしたい旨、提案。

これを了承した。

4. 欧文誌別刷発送方法および価格の変更について（小椋評議員）

*Geochemical Journal 19巻1号から実施の原案について審議。「著者に日本地球化学会の会員がいない場合は、50%の割増し料金とすること」を含め、原案を一部修正（表紙価格1部当たり¥50→¥40）のうえ、承認。

5. 財政問題小委員会（増田副会長）

*現状では毎年の赤字が100万円ずつ生じる。1年200万円の増収をはかることを目標に以下の提案をする。支出の毎年の増加を50万円見込んで、以下に述べる会費値上げ後5年間は、健全財政を維持できる見通しである。

1) 1986年度からの会費等の値上げを総会に提案する。

○正会員会費 ¥6000→¥8000

（ただし学生 ¥4000→¥6000）

○入会金 ¥1000→¥2000

2) 会誌販売価格を値上げする。

○Geochemical Journal：¥2800→¥3400

（1986年度から）

→¥4000（1988年度から）

○地球化学： ¥1800→¥2500

（1986年度から）

3) Geochemical Journal には英文で、「地球化学」誌・会員名簿には和文でそれぞれ広告を取る。実行するための組織としてあらたに増田副会長を委員長とする委員会を置く。

*以上の3件の提案を個別にそれぞれ承認。

6. 名誉会員の推薦について（北野評議員）

*2名の会員について名誉会員への推薦理由の説明ののち、審議にはいった。今回の評議員会では他の案件の審議時間も確保する必要性が有るという前提にたつて、次の2つの意見が出された。「すぐ投票にかけるべきである」との意見、および「次回評議員会に継続審議のあつかにすべきである」との意見である。この2者につき挙手による採決（8：13）の結果、この件については次回評議員会で取り上げることとした。

7. 1985年度年会について（東野評議員）

*東野年会実行委員長より以下の説明をうけた。

1) 筑波研究学園都市地区内の各機関在籍の会員で準備会を発足させた。

2) 1985年10月17～19日に工業技術院共用講堂で開催を予定。講演会場4室とポスターセッション会場を用意する。

3) 講演申込締切：6月24日、要旨集原稿締切：8月17日、申込・送金締切：9月14日

4) 例年と異なる運営として「口頭での講演は、1人1件に限る」「登録料を徴収し、ここで会員・非会員の差をつける」など考慮している。

*特別講演にかえて特別シンポジウム「現代基礎化学と地球化学の接点」を18日の総会（16：00～）前に予定している（鈴木評議員から紹介と協力依頼）。

*従来、運営については開催地に大きくまかされている慣行を確認。運営に関連して、日本化学会との共催のかたちであるため日本化学会会員のあつかいを検討する必要がある。登録時に入会手続きの代行が可能だと会員増加に効果的である、などの意見が出された。

8. 将来計画委員会（角皆評議員）

*昨年の活動のまとめの報告と現在検討中の事項につき説明。とくに2年目の重点活動方針について意見を求めたい旨、発言。

*鈴木評議員から和文誌の改革について早急に着手すべきであるとの意見がだされ、これについて討議。具体案の検討を角皆・小倉・鈴木3評議員にお願いすることとした。

*昨年実施した将来計画委員会アンケート結果は、ニュース増し刷りのかたちで回答機関へ送付する予定である旨、田中評議員から説明。

9. その他

*日本学術会議会員候補者および推薦人の選出について次号ニュースに掲載を検討することとした。

◎会費納入のお願い

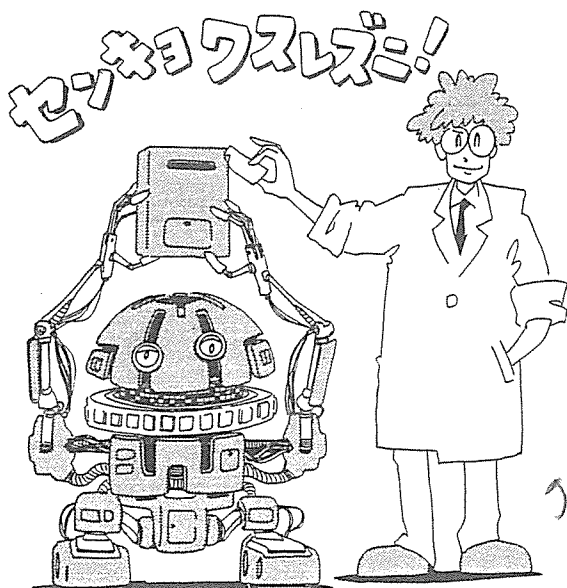
1985年度の会費納入状況が悪く、このままでは学会の運営に支障をきたします。お心あたりの方はすみやかに支払い下さるようお願いいたします。

Sixth International Conference on Geochronology, Cosmochronology and Isotope Geology のお知らせ

来る1986年6月30日～7月4日英国 Cambridge において上記国際会議が開催される予定です。既に会の内容、組織委員、宿泊、巡検などについての概略が紹介された1st Circular (Preliminary announcement と記されている) が配布されています。

1st Circular は〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3 地質調査所 柴田 賢 (電話0298 (54) 3557) あて御連絡いただければ、そのコピーをお送りします。更なる詳細については、Organizing Committee, I. C. O. G., Department of Earth Sciences, University of Cambridge, Downing Street, Cambridge CB2 3EQ, Great Britain にお問い合わせ下さい。

本会議の参加者へは地球化学会ニュース103号に掲載した要項に従い、渡航費の援助が行われます。希望者は申込み時期を失しないよう十分御注意下さい。



日本地球化学会1986・1987年度役員選挙
投票締切 10月12日

ニュース編集係より

○お詫び

本ニュース104号 (前回発行) の6ページに掲載させていただいた御意見は長沢宏会員 (学習院大学) から将来計画委員会アンケートに対して寄せられた御意見の一部 (問9、10に対する部分) です。意見の出所が欠落していたことをお詫びし、ここに補足致します。

○ニュース記事や御意見をお寄せ下さい

本ニュースは年3回 (大体1月、5月、9月) 発行されます。記事は横書き1行24字 (用紙は自由) にて書いていただければ助かります。次回106号は1月10日/切、2月上旬発行の予定です。

編集者	田中 剛, 清水 洋
	〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
	地質調査所 地球化学課
	電話 0298 (54) 3558
発行所	日本地球化学会
	〒113 東京都文京区弥生2-4-16
	学会センタービル (4F)
	日本学会事務センター内
	電話 東京03 (817) 5801
	振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
	普通預金 口座番号 920-833